

文部科学省大学間連携共同教育推進事業

京都三大学教養教育研究・推進機構

—— 時代が求める新たな教養教育

Institute of Liberal Arts and Science

Kyoto Institute of Technology, Kyoto Prefectural University,

Kyoto Prefectural University of Medicine

平成24年度報告書



目 次

ごあいさつ	2
京都府立大学 学長・副学長ごあいさつ、大学紹介	2
京都工芸繊維大学 学長・副学長ごあいさつ、大学紹介	3
京都府立医科大学 学長・副学長ごあいさつ、大学紹介	4
平成24年度の機構の取組	5
リベラルアーツセンターの取組	7
教育IRセンターの取組	8
3 大学教養教育共同化フォーラム 時代が求める新たな教養教育を考える	9
京都府知事のごあいさつ	10
3 大学教養教育共同化フォーラムの概要	12
公開研究会	15
第1回 公開研究会	16
高等教育機関連携による「地域学」と教育の共通化	
一キャンパス・コンソーシアム函館主催合同公開講座「函館学」の運営を手がかりに	
第2回 公開研究会	19
教養教育の新たな展開を探る	
一松本大学の地域連携教育に学ぶ	
第3回 公開研究会	22
生命倫理から臨床倫理へ	
一医学部 / 他学部の教養教育の一例として	
第4回 公開研究会	23
二枚貝で生涯学習を体験ー リベラルアーツの原点に戻る	
他大学視察	24
国際基督教大学 「視察報告」	25
大阪大学 「全学教育推進機構視察報告」	27
IRコンソーシアム(同志社大学、大阪府立大学)「教育の質保証システム構築に向けて」	29
名古屋大学 「教養教育院の視察から」	31
活動計画	33
京都学について	34
IR 準備調査	35
総括コメント	36
資料編	37
本事業について	38
3 大学教養教育共同化フォーラム	45
基調講演および対談	
京都三大学合同交響楽団の学生インタビュー	
本フォーラム参加者アンケート	



京都府立大学

京都府立大学は、人文・社会・自然にかかわる三つの学部を備えた小さな総合大学ですが、2008年4月、「京都府立大学の理念」、および理念をふまえた「京都府立大学行動憲章」を制定しました。行動憲章の前文には、「長い文化的伝統を持つ京都の地において、本学が百十余年にわたって府民に支えられつつ学問の府として活動してきた歴史を踏まえ、学生とともに、これからも京都府の知の拠点として、その使命を果たし続けます。そして、自律自律の精神のもと、大学人の自覚を持ち、豊かな知性と教養、高い専門能力と倫理的判断力を備えた人材を



育成し、高度で独創的な研究を推進することによって、自然との共生をはかりながら、地域社会の発展と府民生活の向上、さらには人類の幸福に貢献します」とうたっています。

京都の静かな環境の中で、少人数の充実した学生生活をおくり、堅実な学風を身につけて社会で活躍したいと思う高校生・社会人の皆さんには、是非府立大学に来て学んでいただきたいと思います。

(渡辺 信一郎学長執筆)

学生の新しいライフスタイルの構築を

文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」の採択を受けて、本年度から三大学教養教育共同化事業が本格的に始まりました。出発点となった「教養教育共同化の考え方(中間まとめ)」(2005年9月)を提案してから、足かけ8年になります。この間の関係各位のご尽力にあらためてお礼申し上げます。

「中間まとめ」は、教養教育の共同化によって豊か

京都府立大学学長 **渡辺 信一郎**



な人間性の涵養をはかること、三大学の学生・教員の交流をつうじて下鴨・北山地域に新しいライフスタイル、大学像を構築することをうたっています。学生が豊かな人間性とライフスタイルを身につけるには、教養教育として何が必要か。2014年の開講にむけて、これからが正念場です。

みずからの歴史をつくる教養を

1985年のユネスコ学習権宣言は、「学習こそはキーワードである」と謳っています。宣言から30年が経とうとする今日、このメッセージは一層切実な時代的要請となっています。時代が求める教養とは、今を生きることと不可分な学びの内実と考えます。このたびの共同化は、大学間の連携・共同の新しい形をつくるものであると同時に、教養教育の理念・目的、方法・

京都府立大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長 **築山 崇**

内容の革新を目指すものです。機構発足から半年、組織体制も整い、公開研究会やフォーラムの開催などを通じて、目指す方向性の具体化も進み、内外への発信も始まっています。今後、3大学それぞれの個性と共同の力をさらに高め、次代を担う主体の形成に寄与していきたいと思っています。



京都工芸繊維大学は、京都高等工芸学校および京都蚕業講習所に端を発する110余年の歴史の中で、「知と美と技」を探求する独自の学風を築き上げてきました。この栄光ある歴史に新たな一頁を加えるべく、豊かな人間性にもとづく技術の創造をめざして技を

極め、人間の知性と感性の共鳴を求めて知と美の融合をめざし、教育研究の成果を世界に発信しています。

本学の特色としては、ものづくりを基盤とした「人に優しい実学」を目指した個性ある教育研究を行っているところです。

ごあいさつ

京都工芸繊維大学学長 古山 正雄



現代社会は、大量消費社会がもたらした資源の枯渇、地球的規模の環境悪化、経済社会のグローバル化と不均等発展など深刻な諸問題に直面しています。一方、日本国内においても急速に進む少子高齢化、格差の拡大などを背景として、私たちは様々な社会問題を抱えています。

このような状況下において大学はすべての学生に、自らが専攻する専門分野とは別に人文・社会・自然にわたる幅広く普遍的な知を学習させ、倫理観や歴史観、国際的な視野を持たせる責務があります。

このことから本学では、人間形成に必要な社会的教

養を涵養し、科学技術と人間性との調和・融合を図ることができる広い視野と感性を備えた高度専門技術者を育成するための教養教育を実施してきました。

京都にある文系・理工学系・医学系の異なる個性の3大学が連携して教養教育を実施することは、更にカリキュラムの多様性と柔軟性を広げ、我が国はもとより世界に貢献しうる、まさに21世紀の知識基盤社会が求める人材を育成できるものと確信しています。

ごあいさつ

京都工芸繊維大学理事・副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

林 哲介

京都北山地域を中心に、3大学が共同して新たな教養教育に取り組もうというアイデアが生まれたのは8年ほど前でしょうか。その後、粘り強く実現に向けた検討が進められ、ようやく京都府と文部科学省の支援を受けて本格的に具体化する段階を迎えました。個性の異なる3大学の学生たちが同じ場で学び討論する教養教育は、全国でもまだ例のない意欲的で興味深い試みです。とりわけ、工芸科学に特化した単科大学であ

る本学の学生にとって、この新しい教養教育の展開は大きな意義があります。目的、志や生い立ちの違う多彩な学生たちが、学問と人間について考え議論しあう共同の場をもつことによって、これからの複雑な社会で活躍していく人としての豊かさを大きく広げます。そのような知的興奮の場をつくるこの取組が充実することを期待し、努力していきたいと思っております。



京都府立医科大学



京都府立医科大学は、1872年（明治5年）、府民自らの寄付によって、京都東山の青蓮院に建設された療病院から誕生した日本最古の医科大学です。以来、時代に翻弄されながらも、140年の歴史の中で培った「人間愛」「地域貢献」「国際的視野の涵養」という教育理念は変わることなく引き継がれ、京都、日本、そして世界の人々の健康に貢献する人

材を育成し、全人的な医療を実践してきました。今も残る校章の「橘」は、「誠実と忠誠」の象徴。季節は巡っても変わることなく鮮やかな緑の葉をつける橘に、京都府立医科大学が、常に医学の真理を探究し、府民への変わらぬ仁慈の愛を持ち続けていることを託しています。

ごあいさつ

京都府立医科大学学長 吉川 敏一



本学の理念は、「優れた医療人を育て、世界トップレベルの医学を府民の医療に活かす。」ことを使命として、「人間性豊かな医療人の育成」「世界トップレベルの医学研究の推進」「地域社会に貢献する医療の提供」という基本方針のもと、新たな「知」を創造・発信し、社会と地域と人々に貢献する大学づくりを目指していくことであります。

三大学教養教育の共同化により、受講科目の選択肢が増加し、学生の多様な関心と教育要望に応えられるようになるとともに、現在、京都府が整備を進めて

おります「教養教育共同化施設（仮称）」が完成すれば、3大学の学生が同一の場所・時間で講義を受けることが可能となります。教養教育共同化の実現により、本学の学生が、京都府立大学、京都工芸繊維大学の異なる専攻分野の学生との交流を深め、また、開かれたキャンパスにおいて多くの府民とふれあい、こうした学生時代に築いた経験を活かした人間性豊かな医療人となることを期待しております。

はじめのごあいさつ

京都府立医科大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員 高松 哲郎

京都三大学教養教育・研究推進機構が発足して6ヶ月を迎えようとしています。振り返ってみますと、10年以上前に将来構想委員会において、将来医療に携わるものを育むための「独自の準備型教養教育」だけではなく、選択の幅も広げるため府大との連携を考え下鴨キャンパスに移転すべきとの意見が出されたのが本

学での始まりでした。その後紆余曲折を経ましたが、共同化講義棟の建設が始まると、机の上で議論してきたものがいよいよ現実になると感じています。具体的な内容が多くなるにつれて困難な状況も生まれます。よりよい形で26年度にスタートできるよう25年度はこれまで以上に議論を尽くさなければなりません。

平成24年度の機構の取組

築山 崇

はじめに

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学による教養教育共同化の取り組みは、平成17年9月の3大学連携推進協議会の教養教育共同化部会「中間まとめ（教養教育共同化の考え方）」によって、具体的な枠組みが示された。そこでは、①共同化によって教養カリキュラムの選択幅を拡大し、一大学では対応できない学生の多様な関心・教育要求に応え、様々な角度から総合的に物事を観察し的確に判断できる能力と豊かな人間性の涵養を図ること、②共同化によって3大学の学生・教員の交流をはかり、下鴨・北山の地域における新しいライフスタイル、大学像を構築することを目指して、共同化にあたっての原則、基礎的条件整備、タイムスケジュールなどが定められた。

平成22年度末には、具体的な事業展開について検討する「企画委員会」が組織され、26年度からの授業実施の共同化の方法、施設、フォーラム開催などについての検討が始まった。

さらに、23年度末には、文部科学省大学間共同教育推進事業に関する情報を得て、同事業への申請を前提に、共同化の新たな組織体制等の検討が始まった。

1. 組織の確立とその体制

24年度に入ってから、23年度までの検討内容を踏まえ、文部科学省事業への申請準備の検討を軸に、3大学連携推進協議会教養教育部会、同企画委員会での検討が進められた。6月の事業募集を受けて、申請書を作成し、6月末に申請書を提出した。その後、9月初旬の採択の通知を受け、事業計画に

沿った新たな組織体制発足の準備に取り掛かった。

(1) 京都三大学教養教育研究・推進機構（以下「機構」）の体制と発足

- ・3大学学長・副学長会議における基本方針の確認
24年9月に、3大学の学長・副学長及び事務局の主要メンバーが集まり、新たな推進組織の枠組み、事業推進の基本方針を確認した。
- ・「機構」運営委員会、及びリベラルアーツ、教育IR両センターの発足

従来の、3大学連携推進協議会の教養教育部会、企画委員会、事務全体会議及びワーキンググループという体制から、運営委員会と2センター及び事務局からなる、三大学教養教育研究・推進機構の体制に移行することとなった。運営委員会は、3大学の副学長、両センターの教員で構成し、委員長には、従来の部会長・企画委員長であった京都府立大学の教務部長が就くことになった。また、教養教育の内容・方法の研究・開発にあたる「リベラルアーツセンター」と、教育の質的保証にかかわる事業を担う「教育IRセンター」を設置することとなった。

- ・「機構」の人的体制の整備

- ①両センターの研究スタッフ リベラルアーツ、教育IRの両センターは、3大学それぞれからの兼任教員と外部から新たに採用する専任をもって充てることとし、専任教員については、より広く優秀な人材を確保するため、公募による採用を行うこととし、年末には採用候補者を決定した。結果、リベラルアーツセンターについては、25年2月1日より、教育IRセンターについては、3月1日

より、専任教員が各1名ずつ就任することとなった。当初の採用予定からは大幅に遅れることとなったが、二人の教員はいずれも就任当初から大きな力を発揮している。

②両センターの事務局スタッフ 「機構」、両センターの活動を支える事務局機能は重要な役割を担っているが、24年度当初から新たに配置された京都府立大学法人の職員（経営戦略室付）2名に加えて、12月からは本事業によって嘱託職員を3名採用し、体制の強化を図った。

(2)「機構」の組織活動（各種会議）の経過

- ・運営委員会 複数回開催の10月を除き、平均月1回開催され、重要事項の審議、事業の具体化に必要な確認事項の検討にあたった。運営委員長、両センター長等による打ち合わせ会議を週1回行い、事業の進捗状況の確認や計画の具体化にあたった。両センターでは、運営委員会、運営委員長、両センター長の打ち合わせでの確認に基づき、事業実施にあたり、3大学の教務を中心とする事務局スタッフが、実務面の点検と業務の遂行にあたっている。
- ・「機構」オフィスの整備 上記のような人的体制の強化と業務量の増加に対応するために、専任教員の研究・執務スペース、事務スペースを確保するため、府立大学に近接する北山エリアに専用オフィスを確保した。

2. 各種事業の展開

(1)機構主催事業

- ・本年度で4回目を迎えるフォーラムを、専用学舎

の竣工を受けた26年度の共同化による授業開始を念頭に置いて、共同化の取り組みを広く一般府民に知らせることを主たる目的として計画・実施した。

(2) 各センター事業

- ・リベラルアーツセンターでは、新たな教養教育の理念構築に向けた研究活動と、学際的・先端的教養教育の開発の一環としての「京都学」構想の具体化を中心に取り組んだ。ゲストを招いての公開研究会4回と、5大学の視察活動に取り組んだ。
- ・教育IRセンターでは、IR活動そのものについての調査・研究を中心に、教育の質的保証にかかわる取り組みの具体化のための予備的検討を行った。

(3) その他

- ・情報発信 本事業は、3大学の教養教育の共同化事業そのものの展開と合わせて、事業に関する情報の発信に重点を置いている。今期は、「機構」ホームページ、フォーラム、事業報告書による発信が主なものである。

3. 24年度の到達点と次年度への課題

上記のように、研究・事業推進体制を確立し、計画した事業の種類の間では、すべてに着手することができた。次年度への課題としては、各事業の量的拡充を進めるとともに、26年度からの新たな授業実施体制構築に向けた具体的な諸準備が重点課題となっている。

リベラルアーツセンターの取組

上田 純一

リベラルアーツセンター（略称LAC）は、京都三大学（京都工芸繊維大学・京都府立大学・京都府立医科大学）の教養教育共同化を目指し、本年度10月に設置された教養教育研究・推進機構内の組織である。

センターでは、三大学から選任された教員各一名（計三名）および外部採用の特任教員二名（現在一名）により構成され、以下のような活動を行っている。

- * 三大学教養教育共同化に向けて、教育理念の深化と教育内容の構築開発を行う。たとえば、先端的な教養教育の開発や「新しい時代の要請に応じたリベラルアーツ科目」、「学部・大学の垣根を超えた学際的科目」等の企画・実施等が当面の課題である。
- * さらに三大学教養教育の枠を超えた現代の大学教育における教養教育の意義についても、広く提言を行っていく。また教養教育だけでなく、専門教育や大学院の分野においても、リベラルアーツ科目の実施について広く検討していく。このような観点から、これまでに後述するような他大学視察や公開研究会などを行ってきた。
- * センターの活動成果は、逐次、講演会、シンポジウムの開催等を通して社会へ発信していく。

以上のような理念の下、センターではすでにこれまで次のような活動を行ってきた。

【他大学視察】

国際基督教大学（12月5日）、大阪府立大学・大阪大学（12月14日）、名古屋大学（2月27日）、筑波大学（3月26日）など

【公開研究会】

「高等教育機関連携による「地域学」と教育の共通化―「函館学」の運営を手がかりに」（12月27日）、「教養教育の新たな展開を探る―松本大学の地域連携教育に学ぶ」（3月8日）、「生命倫理から臨床倫理へ―医学部／他学部の教養教育の一例として」（3月19日）、「二枚貝で生涯学習を体験―リベラルアーツの原点に戻る」（3月28日）など

【シンポジウム】

「時代が求める新たな教養教育を考える」（2月3日）

【新たな教養科目の構想】

「京都学」分野の新たな教養教育科目として「京都学の現場から」（仮称）を検討中

センターでは、これからも引き続き活発な活動を行って参る所存である。諸賢のご鞭撻およびご協力を切に願う。

教育IRセンターの取組

上原 正三

京都三大学教養教育研究・推進機構(以下、機構)の教育IRセンター(以下、E-IRC)は、京都府立大学下鴨キャンパス内の教養教育共同化施設を利用して実施される教養教育の3大学共同化科目にたいして、教育の質保証を推進していくために、その質保証のシステムの研究と開発を目的とするセンターである。

現在、京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学(以下、3大学)では、教育の質保証の推進のために、それぞれの大学に於いて、学生への独自のアンケート調査を実施している。それらには、個々の講義等についてのアンケートをはじめ、入学初年次の大学生活等に関する意識調査を含むアンケート、卒業時に大学での勉学等を振り返ってのアンケートなどがある。

このように、E-IRCでは、各大学に於ける学生へのアンケートについて調査をはじめた。設問項目だけではなく、実施時期、方法、アンケート回収後の取扱い等を含めて、これまで3大学間での情報交換はなかった。そのため、アンケートそのものの情報共有からはじめた。なお、それぞれ実際のアンケート結果そのものについては、どのように検討するか等を含め、先の段階での課題とした。

それらのアンケートからは、各大学の積極的な教育の質保証への取り組みが読み取れるとともに、それぞれの大学の特色に合わせた項目が多いことが認められ、E-IRCでの今後の検討課題のひとつが明確になった。即ち、再来年度(2014年)より実施される教養教育の3大学共同化科目にたいしての教育の質保証を推し進めるために、より有用なデータとし

て学生アンケートを実施するにはどのような形がよいか、例えば、時期、アンケート全体の設問数(回答所要時間)、3大学共通項目のみが良いか、各大学固有の設問を設けるならばその割合はどうか等々、の検討である。

さらに、E-IRCでは、本年度(2012年9月25日)正式に発足した「大学IRコンソーシアム」の取組にもいち早く対応し、事務局等へ訪問して、直接詳しい説明を受け、こちらからも全体的及び個々の点についても様々な質問をすることにより理解を深めた。さらにその成果をもとに、機構を通して3大学へ、大学IRコンソーシアムについての情報発信をおこなった。

大学IRコンソーシアムの共通学生調査は、大学の個別性を考慮しつつ標準性を活用したものであり、前述の各大学での既存の学生アンケートに比べ大学ごとの独自性を際立てる設問ではなく、さらに当然のことながら、教養教育に重点がおかれた設問でもない。

以上のような今年度の検討結果を踏まえ、今後E-IRCでは、3大学共同化科目に対して実施する、教育の質保証の検証等には欠かせない、学生アンケート作成に向け、現在の各大学でのアンケートをはじめ、大学IRコンソーシアムの学生調査との関連、可能な範囲での他大学に於ける学生アンケートに関する情報収集等により、多面的に検討を進めることにしている。



3大学教養教育共同化フォーラム

時代が求める新たな教養教育を考える



京都府知事のごあいさつ —京都三大学教養教育・研究推進機構への期待—

京都府知事 山田 啓二



今日は、こうして「3大学教養教育共同化フォーラム」が行われ、共同化がいよいよ来年から行われることになりました。

たいへん大勢の皆さんが話し合いをし、尽力をして、よりよい教養教育を考えていただけることに対して、まず心からお礼を申し上げます。

私も、ようやくここまできたのだなという思いがありまして、実は、最初にこの「教養教育」を中心とした、府立大学、府立医科大学の充実を考えたのは、私が総務部長のときですから、もう12年ぐらい前だと思います。当時は、府立大学が井口学長さんで、府立医科大学が井端学長さんだったと思います。

なぜ考えたかということ、子どもたちがだんだんと減っていく時代において、小さな大学の魅力をどうやって高めていくのか。一つひとつの大学が、京都の場合には歴史と伝統があり、その中で育まれた素晴らしい個性があるので、それをしっかりと生かしていきたい。ただ、教養学とか、教養教育の課程におきましては、小さいが故に、一つにはリベラル・アーツも含めた教養教育の充実が本当に図れるのでしょうか。

規模が小さい中で、多数の講座や科目をそろえるのは、たいへん難しいと思います。また、子ども

もたち自身も、高校を卒業して社会へと進んで行く中で、一番多くの人と触れ合い、自分の将来を考えていく時期において、例えば府立医大だと、お医者さんを目指すだけで過ごしていくのだろうか。

いろいろな夢を持った若者が、青春というものをキャンパスの中で交流しながら過ごせるような環境を整えていくことは、非常に大きな意味があるのではないかと考えました。

まず、府立大学と府立医科大学の、教養というものを一緒にできないかというお話をさせていただきました。そして、提携が進んでいく中で、私自身も知事になったときに、この両大学の個性と、いままでの歴史をしっかりと生かしながら独立法人化できないかということで、東京のように、1法人1大学というかたちで一元化するのではなくて、京都の場合には、1法人2大学というかたちを取らせていただきました。

そして、その思いの中にありましたのは、やはりキャンパスが近くて、同じように中小規模の大学で、しかも、科目が重ならない、京都工芸繊維大学という、きらっと光る大学がありますので、教養の共同化ができないかということで、3大学の皆さんと話し合いをさせていただきました。

そして、いよいよ府立大学のキャンパスに3大学合同の教養棟の建設が始まり、クラブ活動においても連携を深める中で、これからの未来に向かって、非常にいいかたちでの大学連携共同化ができる雰囲気が出てきました。

さらに、単にこれは京都府の試みだけではなく、国の文部科学省の方からも、この3大学の連携のための支援をいただくことになりました。国、京都府、大学のみんなが力を合せて、新しい時代の国公立の連携という、どこの地域も、どこの大学も行ったことがない試みが、いま京都で花開こうとしていることに対して、関係の皆さまに、あらためてお礼を申し上げたいと思います。

こうして、基盤が整ってまいりましたので、そのうえで、いよいよ素晴らしい教養教育の花を咲かせる試みを、あと1年ちょっとかけて行っていかなければなりません。そのための皮切りとも言われるイベントが、このフォーラムであると考えております。

これは、単なる理想論を追う、いわば論理の世界の話ではなくて、来年にも迫る教養共同化において、子どもたちの未来を、しっかりとつくり上げるための一歩であると確信しているところでございます。

今日は、坂東眞理子先生や、上杉孝實先生にもおいでいただきました。

京都の場合には、大学コンソーシアム京都もありまして、単に3大学の連携ではなく、全ての大学が連携していくという大きな基盤があります。

いずれは、こういうところにも広がっていき、オール京都の試みになっていくことを願いまして、このフォーラムの成功を祈念し、関係の皆さまに、もう一度心から感謝を申し上げまして、開会に当たってのごあいさつとさせていただきたいと思います。

どうかよろしく願い申し上げます。

(文責 事務局)

3 大学教養教育共同化フォーラムの概要

築山 崇

1. 日時 平成25年2月3日 午後1時30分～4時

2. 会場 府民ホールアルティ

3. テーマ

「時代が求める新たな教養教育を考える」

4. 概要

オープニング

京都3大学交響楽団による演奏

今回の教養教育共同化を進める3大学については、交響楽団が設立当初から3大学合同で活動してきた経緯もあり、3大学連携を象徴する存在として、今回のフォーラムのオープニング行事として、演奏を披露した。

また、第1部基調講演と第2部対談の合間の時間を利用して、3大学それぞれの団員に、司会者のインタビューが行われ、お互いの大学・学生のカラーや日ごろの練習のエピソードなどが披露された。



京都3大学交響楽団学生インタビューの様子

(1) 基調講演

・ 演者：坂東眞理子（昭和女子大学長）

・ 講演テーマ

『共感する力、創造する力 時代が必要とする教養』

・ 講演概要

坂東氏は、まず教養という概念のイメージについて、自らを無用者とし、都を捨て東国に下って京に思いを馳せた在原業平の例を唐木順三



『無用者の系譜』

坂東眞理子氏

に引きながら、“主流”に身を置くことよりも、自分自身が有意義な生活を送ることに価値を置くことの意味に触れ、これからの時代の教養は、国家社会に有用な知識・技術（人材）という視点だけでなく、人の痛みがわかる人間としての豊かさを併せ持つことにあるのではないかと述べた。また、すべてを受け入れる心の広さ、あらゆる人に対して礼をもって接し、大切に、対象にいていねいに接することができることが、現代の社会人の教養として求められるとした。

次に、グローバル化の進展との関係で、今日の日本社会に起こっている変化に触れた。氏がもっとも強調したのは、知的好奇心である。「面白がらない人」が増えているのではないか、知的好奇心の磨滅が起こっているのではないかという危惧を述べ、「知らないことがわかるのが楽しい」ということを知らせていくことが教育にとって重要ではないかとした。デジタルな、間接情報ではなく、生の現実に触れることが大事で、知的好奇心、アクティブな学びを支える健康・体力も、教養の基礎の基礎としてきちんと据える必要を訴えた。



演奏風景

大学における教養教育の課題については、個性が花開くための基盤、特に論理的思考力の重要性について述べ、高校生、大学生の学習時間の不足の現状を踏まえ、高卒資格認定試験制度や大学での卒業試験の重視など、ベーシックなものを重視することの重要性を強調した。

グローバル化した時代に通用する人材は、上記のような基礎力とその上に成り立つコミュニケーション力を備えた存在であり、社会全体が利益を得るようなものごとを成し遂げる志（こころざし）、人を納得させる、感動させる統合的な力を持った人材の必要性を訴えた。

(2) 対談

基調講演に続いて、坂東眞理子氏と、上杉孝實京都大学名誉教授（社会教育・生涯学習研究者）との対談が行われた。コーディネーターは当機構運営委員長が務めた。

まず、坂東氏が提起した教養の概念・イメージをめぐって、上杉氏は、ユネスコが1972年に発表した報告書（「ラーニング・トゥ・ビー」）に触れ、

グローバル化した時代に、個性を大切にしながら、人とともに生きる力、教養を養っていかねばならないと応じた。

次いで、大学における教養教育に

話題を移し、多彩な科目の学びから、全体を見渡す広い視野を獲得すること、少人数制や対話形式を取り入れた授業で、自分で考え表現できるようにしていく試みが行われていることなどが、上杉氏から述べられた。これを受けて、坂東氏は、自分の知識や行動が誰かに喜ばれ、人や社会の役に立てたと実感できることが、人間的成長の契機となると述べた。

さらに、今回の3大学による教養教育共同化の取り組みについて、それぞれ次のような意見が述べられた。

3大学が協力することで、幅広い科目が用意できる



上杉孝實氏

こと、また、普段とは違う教員や学生、雰囲気などに触れることによって、学生が知的刺激を受け、創造性を触発されることになる。異なる大学の学生同士だからこそ生まれる議論の広がりも期待できる。

最後に、坂東氏が、講演で述べた「志のある人」について、立身出世、個人の成功のイメージではなく、人が何を求めているか問う視点に立ち、社会に貢献するという目的を持つことの重要性が改めて述べられた。

結びに、コーディネーターから、当機構では、地域との連携・府民との交流を図りながら、新しい教養教育の創造を目指していること、植物園、資料館、大学、コンサートホールなどからなる北山文化環境ゾーンの魅力アップに、教養教育共同化の事業としても貢献していけるように取り組んでいることが紹介されて、フォーラムを閉じた。

5. 成果と課題

・ねらい

今回のフォーラムは、教養教育に関する大学関係者による研究協議というこれまでの内容とは異なり、広く府民に知らせることを主眼に計画された。基調講演の演者や対談者にも、広い視野で教養について語っていただける方、大学教育に深い知見を有するとともに、生涯学習・社会教育という、学校という枠組みの外から教育をとらえる視点を持った方のお力を借りることとした。その点で、坂東眞理子昭和女子大学長、上杉孝實京都大学名誉教授のお二人に登壇いただけたことは幸いであった。

・成果

今の時代が求める教養の核心は、知識や技術の集積だけではなく、人や社会と、多様で柔軟なスタイルでかかわっていく力にあることが、講演・対談の双方を通じて浮き彫りになった。3大学の関係者にとっては、教養教育の課程運営上のメリットにとどまらない、共同化の意義があることを確認する貴重な場となった。

・今後の企画に向けた課題

企画内容は、上記の成果の項にあげたように、ねらいに即したものであったといえる。事前広報は、新聞広告、交通機関でのポスターなど、従来費用の関係でできなかった多様なメディアで行うことができ、参加者の増加につなげることができたと思われるが、参加者の多くが、これまでの大学主催の公開講座受講者へのダイレクトメールによるものであった点など、PR効果の点で検証も必要である。また、フォーラム実施後の広報については、新聞社の取材・企画記事で大きく発信できたことは、情報発信を重視する本事業の趣旨に合致するものとなった。

当日の運営についても、主催者代表の知事挨拶、3大学交響楽団による演奏、基調講演と対談という、限られた時間の中での多彩なメニューを、プロの司会者を起用するなどして、スムーズに運営できた点は、準備にあたった機構スタッフの貢献と合わせて、肯定的に評価できるものである。



公開研究会



高等教育機関連携による「地域学」と教育の共通化

— キャンパス・コンソーシアム函館主催合同公開講座「函館学」の運営を手がかりに —

築山 崇

■公開研究会 1

(平成24年12月27日 午前10時～15時)

1. テーマ

高等教育機関連携による「地域学」と教育の共通化
— キャンパス・コンソーシアム函館 主催
合同公開講座「函館学」の運営を手がかりに —

2. 講師：キャンパス・コンソーシアム函館

運営会議副座長（函館大学商学部教授）
田中浩司先生

3. ねらい

今回の研究会は、京都の取り組みにおいて、「京都学」が、学際的・先端的科目開発の一例として挙げられている関係で、地域学にかかわる他大学・他地域の事例に学ぶことを目的に設定された。事例としては、24年9月に開催された、全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムの第6分科会で報告された、キャンパス・コンソーシアム函館を取り上げた。

4. 報告概要

報告は、次のような項目に沿って、詳細に行われた。

- I キャンパス・コンソーシアム函館（CCH）誕生の背景
- II キャンパス・コンソーシアム函館（CCH）組織と事業概要
- III CCH主催 合同公開講座「函館学」の歩み
- IV CCH主催 合同公開講座「函館学」の成果

と課題

- V 高等教育機関連携事業の現状把握
- VI 教育連携事業のメリット・デメリットと課題
- VII 「地域学」の構築・継続と教養教育
— CCH「函館学」、
共同開講科目で考えたこと —
- VIII 地域を学ぶ科目の体系化のために

コンソーシアム誕生の背景として、函館には、短期大学2校、高専、専門学校各1校に加えて、4年制大学が4校あったが、いずれも単科大学あるいは単一学部のみのものであったため8つの教育機関が連携・協力することで、「函館圏大学群」を形成できるのではないかということになり、合同の公開講座を開設するところから始めて、大学群の推進母体となる「大学センター」の設立が目指された経緯が、はじめに紹介された。

構想はその後文科省の戦略的・大学間連携事業に採択され、組織体制の整備が進み、合同講座以外にも、合同広報、アカデミック・リンク（CCH加盟校による合同での研究・教育成果の発表会）、単位互換・合同カリキュラム開発、図書館連携、就職支援など各種の連携事業が展開されることとなった。

合同公開講座は、平成18年度にスタートしているが、20年の文科省事業採択（高等教育機関連携による『キャンパス都市函館』構想）が契機となって、コンソーシアムが主体的に企画・立案・運営にあたるCCH組織のガバナンスの整備が進められた。

「函館学」の成功の要因として挙げられているのは、潜在する市民の高い学習意欲と大学や市が持つ



「函館学」の成功の要因



潜在する市民の
高い学習意欲

大学や市が持つ教育力

魅力あるテーマ「函館学」と講演
+ α (会場・広報など工夫の積み重ね) + ケーブルテレビ

[戦略的大学連携事業経費]=適時打

魅力あるテーマ「函館学」と講演 + α (会場・広報の充実)
+ ケーブルテレビ + **ブックレット**
地域学の魅力+実績・工夫+多様な媒体・・・成功!

教育力をあわせて、魅力あるテーマとして「函館学」と講演を設定したこと、そこに「戦略的大学間連携事業」がいわば適時打として働いたことである。ケーブルテレビやブックレットなど多様な媒体を駆使したことも成功要因として挙げられている。

■函館コンソーシアムの取り組みの教訓

函館での取り組みから、今回の京都の事業が学ぶべき点は、特に報告の以下の諸点を中心となると思われる。

(1) 高等教育機関連携のメリット・デメリットと課題

連携によるメリットとして挙げられているのは、学生が教育・研究に臨む機会の増加、学学連携（教育機関相互）による研究の深化、教育の高度化、他大学・他分野とのつながりなどが、学生にかかわるメリットしてあげられ、教員にとっては、学学連携による研究の深化、FD、地域貢献、大学の知名度アップなどが挙げられている。

反対に、デメリットとしては、通学コストの増

大、学修時間の減少、科目選択の困難、煩雑な手続き、成績の不安度が学生に関してあげられ、教員に関しては、特にコーディネーターにかかる様々な負担が挙げられている。

これらから見える課題に対応して、学生のニーズをくみ上げた科目の設定や、研究者データベースの構築など解決への視点が紹介された。

(2) 「地域学」の構築・継続と教養教育

報告者は、教養の語義やリベラルアーツの起源にも触れつつ、また、各地の地域学の例も紹介しながら、地域学の意味するところ、地域学における教養概念について「私見」が披露された。

地域学の定義に関して、報告者は、いわゆる「地域活性化」のためだけではない「学問」としての体系、独自性をどう考えるかという視点から、「各大学の成り立ち、背景を意識して、その地域、各大学のもつあらゆる学問分野を理解するための土台となるようなものが、『地域の教養』ではないか」と、問題提起している。

(3) 地域を学ぶ科目の体系化

報告の最後で、「地域を学ぶ科目の体系化のために」として、以下の諸点が提起された。

①地域学のテーマの立て方（各大学が持っているモノ、学問体系・資源など） ②各大学が共に持っているかもしれないモノ・共通する地域 ③学学連携、産学連携によって得られる刺激 ④新しい地域学のジャンルの設定（教育イベント、デザイン、社会学、研究紹介など） ⑤地域学を別の視点から考える（教育課程の側から） ⑥「地域学」の独自科目化



研究会風景

5. 質疑・討論

報告後の議論では、次のような質問・意見があり、それぞれ報告者から、報告内容に返ってより詳しい説明がなされた。

- ・ 学生ニーズへの対応
- ・ 京都学の構築にかかわって
- ・ 科学リテラシー教育の可能性
- ・ 「全体を見渡す」…世界観の形成

2番目の、京都学の構築にかかわっては、学生のニーズは高く、体験型のプログラムへの関心も強いが、フィールドワークとして本格的に展開しようとすると、時間やフィールドの選定など条件面での難しさが紹介された。これに対して、人数を限定して、1週間ごとに取材型のプログラムを用意するなどのアイデアが、参加者から提起されていた。

また、自然科学系の教員からは、地域学が、科学リテラシーを教える場になりうるかという問題が、疑問と同時に、可能性の探究課題として示されていた。

6. 本研究会の成果

本研究会では、午前中の報告と討論で、上記のような内容で、「地域学」の可能性と課題について、函館学と京都学などを素材に、お互いの認識を深めることができた。休憩を挟んでの午後の意見交換では、事務局のスタッフが感想を述べ、それをもとに、報告者から、函館コンソーシアムにおける運営面の実態や課題が紹介され、京都における3大学連携の運営面でも有益な意見交換を行うことができた。京都では、大学コンソーシアム京都による、大規模で多彩な連携が行われているが、函館の事例は、3大学連携のような、いわばミニ・コンソーシアムの展開についてのヒントを多く含んでおり、引き続き交流の必要性を感じさせるものであった。

教養教育の新たな展開を探る — 松本大学の地域連携教育に学ぶ

築山 崇

■公開研究会 2

(平成25年3月8日 午後2時～5時、午後6時～8時)

1. テーマ 松本大学の地域連携教育に学ぶ

2. 講師

松本大学学長 住吉廣行先生

総合経営学部長 木村晴壽先生

同観光ホスピタリティ学科教授 白戸洋先生

3. ねらい

大学一体となって、地域連携教育に取り組み、多くの成果を上げている松本大学の取り組みに学ぶとともに、京都府立大・工織大からも地域と連携した実践の報告を行い、地域連携教育の成果と可能性について深める。

4. 報告概要

・松本大学における地域連携教育をめぐる評価・検証(木村)

木村総合経営学部長からは、「地域連携教育をめぐる評価・検証」と題して、大学・学部の設立時の経過およびコンセプトについて、まず説明があり、その後、設立10年間の実績を踏まえて、地域連携教育の現時点における評価の報告があった。

長野県における高校卒業者の県内残留率が、12年前は全国最低の7.3%という事実を踏まえて、長野県の高等教育の充実、地域社会への人材供給の期待に応えること、長野県・松本市・松商学園が共同出資して設立にとりくむという3点が設立時の背景・ねらい・経緯の特徴として紹介され、新たな4年制大学の設立によって、「地域の若者を

受け入れ、地域に貢献できる人材に育てて、地域に返す」という設立コンセプトであったことが述べられた。

設立10年を経て、現在長野県高校生の県内残留率は15.9% (2012.12) となっているが、全国の高校生の残留率も、この10年で3%増加していることを勘案すると、評価は難しいとされた。全国的に、地元志向ということも言われているが、多くの場合、それは、多くの大学が集積する大都市のことであって、地方小都市の場合、必ずしもあてはまらないのではないかという見方も示された。

設立時のコンセプトについては、学生の現状を踏まえ、従来の社会科学系授業への反省から、具体的体験から出発して、理論的一般化に至る「帰納的教育法の導入」が謳われている。この、「帰納的教育法」は、実体験や地域活動の導入として具体化されるが、それは、正課教育としての地域活動と、学生支援としての地域活動のサポートに大別される。後者の学生支援について、松本大学の特徴となってい



るのが、「地域づくり工房『ゆめ』」である。これは、学生の地域活動を支援する組織として設立されたもので、授業で学んだ知識や技術を、地域づくりの中で実践的に活かす、あるいは、大学の枠や世代にとらわれず、地域社会との交流や連携を通じて「地域づくり」の実践を経験するための組織である。

・小さな大学の大きな挑戦～地域を担う人材を養成するための大学教育の実践～（白戸）

冒頭、教育を通じて地域とつながる、課題発見型の帰納法的な教育手法（現場から理論へというプロセスで学びを設定する）、現代の学生の特徴を踏まえた教育（「実社会の問題」と「自らの生き方」をいかに関係づけるか）という視点が示され、不揃い野菜をもったいないと感じるところから始まった野菜の引き売りが、中心市街地の空洞化や高齢化の実態の認識に発展し、買い物弱者への働きかけの取り組みとなった事例が紹介された。そして、この実践の手法で身に付く「力」が、学問的理解と問題意識・興味、地域理解と課題解決能力、社会性（対人関係構築能力・プレゼンテーション・コミュニケーション能力）からなる、「学士力+社会人力」と説明された。その際の「コミュニケーションは能力ではない、意欲×場数」という提起は、帰納的教育手法というベースによる、底の浅いコミュニケーションスキルの育成に対する批判的提起として興味深いものである。

・京都府立大学「環境共生教育演習」の取り組み（上杉）

2007年度から始まった府立大学の環境共生教育演習は、主に1回生を対象に、文系・理系の教員がオムニバス方式で講義を行い、それぞれの講義に対

応したフィールドワークを組み合わせたものであり、全学共通教養教育科目に位置づけられている。

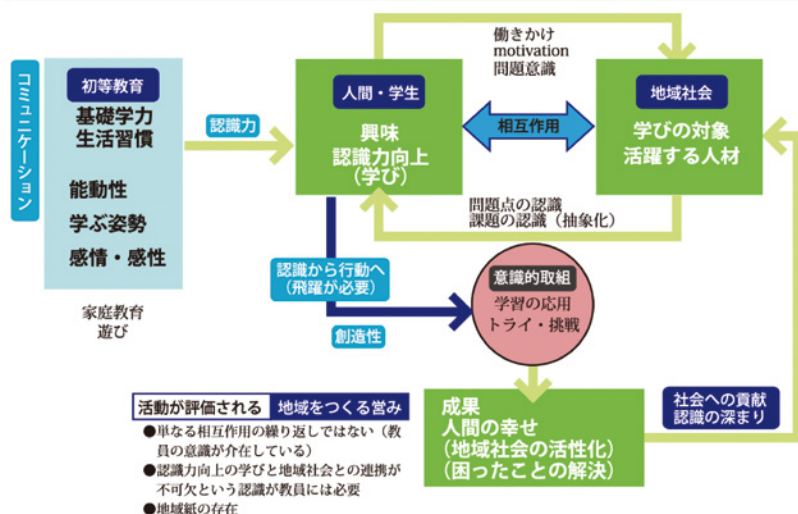
科目のねらいは、「豊かな自然、生活文化、地域共同体が今も残る京都府農山漁村をフィールドとして、持続可能社会を探求し、地域の自然、暮らし、産業、歴史文化と共生していくための、『環境と共生する力』を習得する、体験学習型の環境教育」と定められている。選択科目でありながら、受講生は、対象学年の過半数に達する人気科目となっている。2012年度をとると、実習フィールドは、京都府内の7つの市町と兵庫県1市で15のプログラムが展開されており、①汗をかく学習、②地域の魅力発見、③地域住民との触れ合いの要素を含んでいる。

・京都工芸繊維大学「川下り方式インターンシップによる産学連携ものづくり実践教育」（増田新）

本報告は、2008年度文部科学省「産学連携による実践型人材育成事業－ものづくり技術者養成」に採択された事業を紹介するもので、以下の概要は、京都工芸繊維大学ホームページに紹介されている内容をもとにしている。

事業のねらいは、「京都工芸繊維大学、京都試作ネット（中小企業群）、京都を代表する製品開発企業、の3者が緊密に連携し、問題解決型デザイン実習とインターンシップ及び講義を有機的に結合することによって、学生が自ら企画設計した『マイ・プロダクト』が形になるまでのリアルなものづくりプロセスを追跡的に体験する『川下り方式インターンシッププログラム』を開発し、創造性と批判的思考力を持ち、モノづくりプロセスを多面的・俯瞰的に見通す力を育成することを目指します」とされている。

帰納的教育手法 —現場から理論へ—



れ、情報が共有されていること、「ゆめ」では、活動に学問的な専門性より、地域との交流の仕方を学ぶことを重視しているが、3年次の活動では、例えば、モノづくりの体験を介して共通体験をもつことと、専門的な学びとの切り分けができるかどうか問われてくることなど、説明された。

他には、正課で行っている活動の評価や担当教員のマネジメント、地域活動以外の一般的な科目との関係などについての質問があった。

6. 成果

閉会にあたっての府立大学学長からのあいさつでも触れられていたが、今回の松本大学の報告は、地域貢献を主要なミッションのひとつとする府立大学にとっても、具体的な実践のヒント、示唆に富んだものであった。

地域住民の協力を得ての、体験型プログラムというだけであれば、高等学校までの教育で取り組まれている総合学習などの内容と、どう異なるのか。「大学教育として成立しているのか」という根本的な問いかけが、松本大側から投げかけられていたが、この問いは、京都の3大学の教養教育の共同化の中でも、3大学の学生がともに参加する、体験型カリキュラムの展開の中でも、重要な視点となるものである。学習動機・意欲の喚起や問題関心の意識化、現代の地域社会を理解するための基礎となる体験的学びの機会の確保など、今後研究的に深めていくべき課題である。

このような点で、今回の研究会は本機構にとって大変有益なものであった。

「川下り方式」とは、マイ・プロダクトという「舟」に乗って、役割（role）を順番にスイッチしながら、ものづくりプロセスという「川」を上流から下流に下っていくイメージによるものである。インターシップには、5社の在京製品開発企業や、京都試作ネットに加盟する18社の企業が参加している。

教育プログラムは、機械工学分野またはプロダクトデザイン分野の専門教育を受けた3年次学生を対象とする半年間のものであり、大学、京都地区の製品開発企業及び京都試作ネットが緊密に連携して実施するものである。プログラムの特徴と教育効果は、全体として、「モノづくりプロセスの全体を見通す力を持つ俯瞰的人材の育成を目指す」ところに見いだされる。

5. 質疑・討論

はじめに、松本大学からの報告に対して、正課としての地域活動と学生支援としての地域活動、それぞれの松本大学の教育全体の中での位置づけを尋ねる質問があった。これに対して、正課外の学生支援については、運営組織に各学部、学科から教員が参加している「地域づくり考房ゆめ」を通して活動が把握されていること、正課での地域活動については、教員、学生それぞれから年次報告書が発行さ

生命倫理から臨床倫理へ — 医学部/他学部の教養教育の一例として

長崎 生光

日時：2013年3月19日(火) 14時30分～17時
場所：京都府立医科大学 看護学学舎 第1講義室

●テーマ

生命倫理から臨床倫理へ
— 医学部/他学部の教養教育の一例として

●講師 浜松医科大学教授 森下 直貴 先生

■講演要旨

専門（職業）教育に対する教養教育の位置づけは、大学というシステムにとって永遠のテーマといえる。これに関してこれまで二つの考え方が見られる。一つは、フンボルトやゲーテ仕込みの「普遍的人間」の理念を掲げ、専門人に不可欠な人格的土台の陶冶をめざす。もう一つは、専門教育のための土台固め（初歩・入門）として、語学や常識といった汎用的技能の習得をめざす。しかし、前者が掲げる「普遍的人格」は現代人には窮屈すぎるだろうし、後者の汎用的技能の育成からは人間性が抜け落ちている。たしかにどちらの考え方も必要ではあろうが、それだけでは不十分である。

その欠を補うための第三の考え方として、ここで提唱するのが「複雑性に耐えうる思考」という目標である。専門教育では一定の「単純化」は避けられない。専門技術がそもそも機能（交換可能な変数間の一定の関係）の単純化だからである。それに加えて、現代社会自体が機能分化したシステム間の連関として成り立っている。したがって単純化がたしかに避け難いとしても、過度に単純化されていることに気づくことはできる。この気づきを刺激することこそ「教養教育」の現代的な意義を認めたい。

例えば、バイオエシックス（生命倫理）をとりあげると、どの教室でも有名な四原則が教えられている。しかし、なぜその四つなのだろうか。専門（技術）教育ではその理由を問うことなしに、ただ覚えさせるだけである。その結果、臨床現場では使えないことになる。それに対して教養教育ではその根拠や前提を考えさせる。考えることを通じて、原則を活用しつつ自ら新たな枠組を作ることも不可能ではない。

残念なことに、過度に単純化された思考は、生命倫理や臨床倫理の領域に限らず、科学（学問）全体に広がっている。典型例は「トロッコのジレンマ」であるが、これは冷戦時代の戦略的思考の延長上にある。経済学や医学や環境科学（予防原則）でも、「リスク」計算をめぐる過度の単純化が見られるが、その影響は甚大である。

それでは、単純であることを自覚しつつ過度の単純化を避けるために、具体的に何をどう教育すればよいのだろうか。第一部では、そのヒントを根本から探るために、「意味」「コミュニケーション」「倫理」「医療システム」「医療倫理」をとりあげてみた。その結論を言えば、自分の眼差しには見えない区別の向こう側の可能性を不断に考慮することである。以上を受けて第二部では、浜松医大の教養教育の実情の一端を紹介し、その課題や今後の改革について考えてみた。

長崎 生光 ながさき いくみつ

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター 京都府立医科大学教授

二枚貝で生涯学習を体験 — リベラルアーツの原点に戻る

藤井 陽奈子

来る2013年3月28日木曜日に、京都大学総合博物館・館長の大野照文氏を講師に招き、第4回公開研究会が京都府立大学の大学会館2階にて予定されている。



大野照文氏

大野氏は、先カンブリア時代から古生代にかけての爆発的な生物進化の研究者である。一方で、学習プログラムに「ものから入る学びの楽しみ」を導入し、その開発に取り組む。

今回の公開研究会は、「二枚貝で生涯学習を体験—リベラルアーツの原点に戻る」をテーマに、プログラムの前半13:30~15:30では「貝体新書」と題した実習が予定されている。続いてプログラムの後半15:35~16:30には、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授であり同大学美術工芸資料館・館長の並木誠士氏を招き、大野氏との対談が控えている。

まず、前半の「貝体新書」という、どこかで聞き覚えのある書物のようなタイトル付けがなされた実習では、1組6~8人ずつのグループに分かれて、二枚貝を使った次のような実習が企画されている。

貝殻だけで2時間遊ぶ。

ふだん何気なくある「はまぐり」を皆で調べると生き物の不思議さがわかる。

博物館や美術館の展示物に来館者がどれだけ近づけるかが大きな課題。

来館者に、いろんなものを興味をもって見てもらえるようにするには、少しガイダンスが必要。

そのガイダンスの仕方がわかる。それとともに、「もの」の持っているおもしろさが深いところでわかる。

次に、本研究会の後半では、大野照文氏と並木誠士氏との対談が行われる。そのタイトルは、「リベラルアーツの原点・文理は融合できるか」である。

大野氏と並木氏は、2012年に京都大学総合博物館で開催された特別展「大学は宝箱！京の大学ミュージアム収蔵品展」に連携して臨まれた。そのような理と文の2名の教員たちが、教養教育についてどのように切り込んでくるのかが対談の焦点となるだろう。

対談では、文理の博物館の違いを捉えつつ、先述の「大学は宝箱！京の大学ミュージアム収蔵品展」の展示をとおして、京都の各大学がなぜ資料を集めるのか、また、なぜ見せるのかを考えるだけでなく、なぜ各大学が連携して資料を集めるのか、その意味を考える。

それらを踏まえて、本研究会では、教養教育を文理が連携して行う意味を考えるという。

さらに、この公開研究会では、学芸員志望の学生への参加も呼びかけている。学芸員にかかわる学習を体験するとともに、特に後半、2名の教員による博物館や美術館についての白熱した対談を見せることで、学生に緊張感と面白さが伝わることを期待してやまない。

本研究会の詳しい模様は、改めて報告する。



藤井 陽奈子 ふじい ひなこ

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター特任准教授



他大学視察



視察報告

大谷 芳夫

平成24年12月5日（水）13時30分より、築山、上田両府立大学教授、及び大谷の3名が、国際基督教大学を訪問し、約2時間にわたって視察・質疑等を行った。

■教養教育の理念、目標

国際基督教大学（ICU）は、キリスト教の精神に基づき、『国際的社會人としての教養をもって、神と人々に奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資すること』を目的として、1953年に献学された日本で初めての教養学部一学部の大学（College of Liberal Arts）である。献学の精神や学部名称にあるように、大学全体が教養教育に非常に重きをおいた教育研究機関であるという点が特徴である。

このような特徴は、以下に抜粋した3つのポリシーにも明確に示されている。アドミッションポリシーでは、「高校までの学習から脱皮し、自ら問い、答えを探し出すリベラルアーツの学びにおいて自己変革できる『資質』を選考基準とし、机上の思考を行動する知性へと変革する『行動するリベラルアーツ』に共鳴する人を受け入れる」としている。

また、カリキュラムポリシーでは、「リベラルアーツ教育のもつ” Later Specialization” という考えに立ち、少人数教育により学生1人ひとりが主体的に科目を選択できるよう適切なアドヴァイジングを行う」ことを基本方針としている。

さらに、ディプロマポリシーでは、平和を構築する地球市民としての教養と責任を身につけ、神と人々に奉仕する有為の人材を育成するために、「学問への使命、キリスト教への使命、国際性への使命を

掲げ、文理を超えた幅広い分野で所定の教育課程を修め、以下のような能力を身につけた者に対して学位を授与する」として、5つの能力を挙げている。西尾学部長によると、それらの能力を総括するならば、「責任ある地球市民として生きていくための教養」を身につけていることが学位授与の要件であるとのことであった。

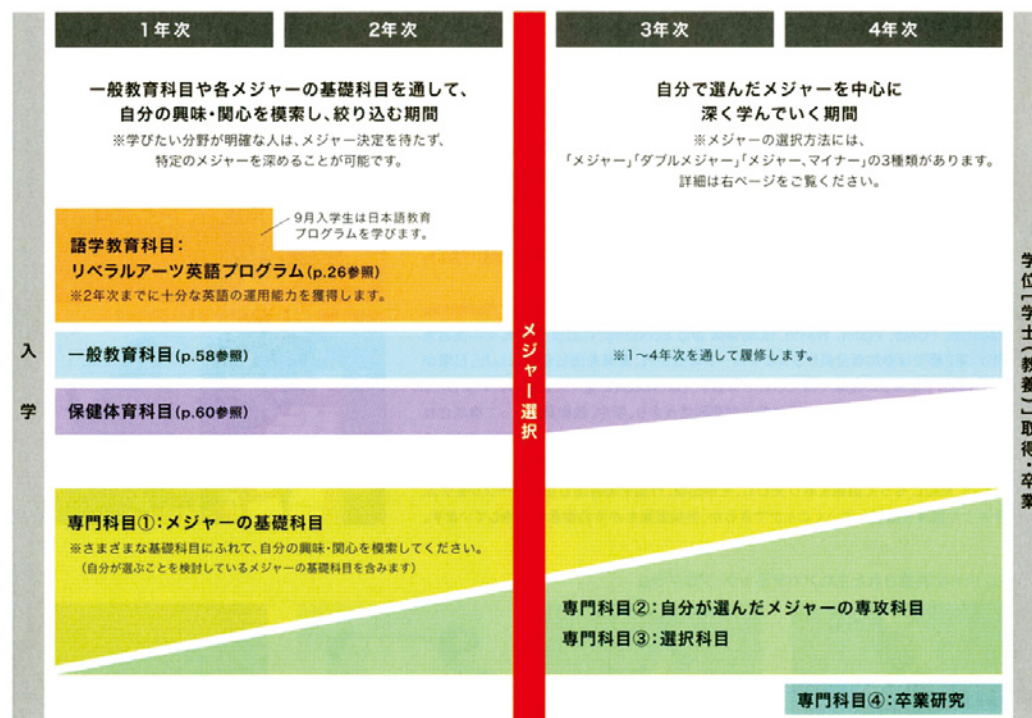
以上のように、ICUは、献学の精神、3つのポリシーという大学教育の基本方針のいずれにおいても、教養という概念が中心的役割を占めており、教養教育に関しては、国内では希少な大学であるといえる。

■教養教育の実施体制、カリキュラム等

前項で述べた教養教育に関する立場は、ICUにおける学部構成やカリキュラムにも明確に反映されている。ICUでは2008年に学部改組を行い、それまでの人文科学科等6学科をアーツ・サイエンス学科に統合した。この改組により、学生はアーツ・サイエンス学科に所属し、リベラルアーツの枠組みの中で学修・研究を行うことが教育組織として明確化されている。

主な学部教育プログラムは以下のように構成されている。全学教育科目としては、1・2年次を対象とした必修科目「リベラルアーツ英語プログラム」が設定され、入学時にレベル別に分けられた約20名のクラスで25単位の集中的な学習を行なう。このプログラムの特徴は、“English for Liberal Arts”という標語に示されるように、英語力だけでなく、論文作成法や批判的なものの考え方など、大学での学修に必要な技法、英語で学ぶ力の習得を目指す点

学部入学から卒業までの流れ



にある。一般教育科目は21単位の取得が卒業要件となっており、概説や入門講座ではなく、各分野の核心に触れ、様々な学問世界を体験する機会を提供するもので、4年間を通じて履修できる。保健体育科目は1・2年次を中心に4単位が要件とされている。その他、特徴的な科目として、学生が自発的な意志に基づいて一定の期間、社会奉仕活動を経験することで単位を取得できるサービス・ラーニング科目等が設定されている。

専門科目としては、基礎科目(18単位)、専攻科目(21単位)、選択科目(38単位)、卒業研究(9単位)が設定されているが、これらに関する特徴として次の2点が挙げられる。第1に、1・2年次で取得する基礎科目は、人文・社会科学、理・工学の極めて幅広い学問分野(「メジャー(専修分野)」と呼称)をカバーする30以上の科目から学生が自主的に履修し、自分の興味・関心を探索することを目的としている点である。即ち、学生は、入学後の2年間をかけて自らの興味・関心を探索し、3・4年次でどの分野を深く学ぶかを考えることが可能である。第2に、専攻科目や卒業研究に関わるメジャーの選択パターンとして、通常の1分野履修に加え、

2分野を同時履修する「ダブルメジャー」、2分野を比率を変えて履修する「メジャー、マイナー」の3種類が設定されている点である。いわゆる「副専攻」を設定している大学はいくつか見られるが、このようなバリエーションを持たせ、学生の自主性・特性に配慮したカリキュラムは非常に興味深いシステムである。

■終わりに

これまで述べてきたように、ICUでは、基礎科目も含め、入学後2年間はほぼ教養教育に特化したカリキュラムを採用しており、メジャー選択後も幅広い視野を獲得できるような履修システムを導入している。一方、現在多くの(特に理工系)大学では、1年次から学科・課程別の専門教育を開始し、卒業時点での各分野の学士力を保証しようとするカリキュラムを採用している。両者の優劣を軽々に論じることにはできないが、学部卒業時点で終わる教育ではなく、「一生かけて学ぶための基礎を構築する教育」を目指すというICUの決意と選択が強く印象に残った視察であった。

全学教育推進機構視察報告

大谷 芳夫

平成24年12月14日（金）10時30分より、築山京都三大学教養教育研究・推進機構運営委員長、上原同機構IRセンター長、大谷、及び林京都工芸繊維大学学務課長の4名が、大阪大学全学教育推進機構を訪問し、約90分にわたって視察・質疑等を行った。

■教養教育の理念、目標

大阪大学は、国立大学法人に移行するにあたって、2003年3月に「大阪大学憲章」を制定し、11項目の基本理念を宣言し、全構成員の指針としている。それらの項目には「教養」という用語は直接現れていないが、「4. 学問の独立性と市民性」の中で、「大阪大学は、教育研究の両面において、懐徳堂・適塾以来の自由で闊達な市民的気概と批判精神やその市民性を継承し、発展させる。学問の本質を踏まえ、いかなる権力にも権威にもおもんばかることなく、自主独立の気概のもとに展開する。」とし、また、「7. 総合性の強化」の中で、「大阪大学は、総合大学としての特色を追求する。たんなる部局の集合体ではなく、人文科学・社会科学・自然科学・生命科学など、あらゆる学問分野の相互補完性を重視するとともに、新時代に適合する分野融合型の教育研究を推進する。」と述べており、自立性・批判精神や幅広い視野の獲得などの、教養教育が目指すべき目標に触れている。

この憲章を受けた大阪大学の教育理念では、「教養」、「デザイン力」、「国際性」を掲げ、教養に関しては、1・2年次生を対象とした教育だけでなく、3年次以上の学部学生や大学院生を対象とした「高度教養プログラム」を実施するなどの取り組みを行っている。

以上のように、大阪大学は、大学院を中心とした世界最先端の学術研究の場を目指しているが、学部レベルを中心とした教養教育についても重きを置いた教育研究機関であるといえる。

■教養教育の実施体制、特色ある取り組み等

大阪大学での教養教育は、2012年に設置された全学教育推進機構によって企画・運営されている。この機構は、2004年4月に設置された大学教育実践センターを発展的に解消し発足した組織であり、企画開発部に、学部共通教育、大学院横断教育、言語教育、海外教育、スポーツ・健康教育、教育学習支援の6部門が、実施調整部に、基礎教育、教養教育、言語教育の3部会が設置されている。この機構設置の主旨は次の3点である。第1は、それまでの大学教育実践センターは、学内各部局から選出されたメンバーによって、いわゆる「横並びの委員会方式」で運営されていたが、全学的な協力体制をより実質化するためには、部局の上に位置づけられる組織が必要であったことである。当初は、副学長を機構長とする構想があったが、現状では学長補佐が機構長となっており、全学への「指示」が行える組織にはなっていないとのことであった。第2は、大阪外国語大学との統合に伴い、多言語の教育研究が可能となり、同時に言語教育に関する改革が必要になったことである。この点に関しては、言語教育部門と言語教育部会に、それぞれ多言語教育セクションと多言語教育科目チーフコーディネーターを置くなどして対応している。第3は、前項で述べた大学院をも含む「高度教養プログラム」を開始することによって、新たな現代の教養教育を目指す体制を整

備する必要があったことである。この高度教養プログラムは、いわゆる旧制高等学校式のリベラルアーツ教育（古典を読むなど）の実施、国際化への対応、市民として持つべき教養の涵養、を3つの柱としてスタートしたところである。

大阪大学の全学教育は、共通教育系科目と専門教育系科目に大別される。このうち、共通教育科目は、教養教育科目、言語・情報教育科目、基礎セミナー、健康・スポーツ教育科目の4つに分かれている。教養教育科目は、さらに、「入門」「基礎的教養」「思考力」の養成を目指す（従来型の）基礎教養科目、現代社会が抱える様々な問題を扱う現代教養科目、国際化時代に対応する会話・教養・マナー等を磨く国際教養科目、大阪大学における最先端の研究を紹介する先端教養科目に分類され多数の授業が設定されている。また、1年次から医学系を除く全学部の学生を対象とした基礎セミナーが開講され、担当教員が設定したテーマに基づいて少人数での対話型教育が行われている。このセミナーは全学で190以上のクラスが開講され、異なる学部の学生間の交流の助けともなっている、特徴ある試みである。さらに、新型基礎セミナー（ディスカバリーセミナー）では、学生が自ら取り組むテーマ・課題を設定し、調査・研究から成果発表まで全てを主体的に実施する授業が行われている。

大阪大学では、共通教育を担当する教員と大学院生に対する研修も組織的に実施されている。具体的には、初めて共通教育を担当する常勤・非常勤教員に対しては共通教育新任教員研修が、大学院生に対しては共通教育ティーチング・アシスタント講習会が開催され、授業担当教員マニュアルや大阪大学

TAハンドブック等も整備されている。

以上のように、大阪大学では、多数の教員を擁する総合大学ならではの多様な教養教育が、関係教員や大学院生に対する丁寧なオリエンテーションのもとで実施されている。

■終わりに

大阪大学は、11学部、学生収容定員数約13000名、専任教員数約3000名を擁する総合大学であり、そのリソースを活用して、広範囲・多様な教養教育を実践している。他方で、巨大なリソースを教養教育の面でどのようにマネジメントしていくかについては多くの困難があり、その全てが解決しているわけではないとのことであった。窪田部門長の解説で印象的であったのは、全学教育推進機構の立ち上げにあたり、組織の設計とともに、どの立場にどのような人材を配置するかが重要なポイントであったという点である。具体的には、各部門長や部会長をはじめとする機構の構成員は、関連部局との交渉を行い協力を得る必要があるが、そのような作業を円滑に遂行できる人材の選任にあたっては、候補者の経歴や専門分野、部局等との関係に十分に配慮したと言うことであった。機構といういわば「ハコ」を作るだけでなく、それを運用する人的資源の配置が重要という指摘は、3大学教養教育共同化事業を具体的に推進する上でも参考になるのではないかと感じた。3大学教養教育共同化は、小規模ではあるが、学部ではなく大学を超えた事業であり、今後共同授業開始へ向けた準備を進める上で、各大学の構成員の理解と協力を得るためのさらなる努力や工夫が必要である。

教育の質保証システム構築に向けて

大倉 弘之

■はじめに

本稿は、IRコンソーシアムの基幹大学である同志社大学(2012年11月26日)と大阪府立大学(2012年12月14日)での視察を踏まえたものである。

教育IRセンターは「質保証システムの研究開発」を目的として設置された。大学の質保証については、学校教育法で義務化された認証評価システムの導入により、現在では制度化されていて、既に各大学毎に何らかの質保証システムが存在しているといえる。シラバスの開示（大学設置基準で義務化）、授業評価アンケート等の学生調査に基づく教育改善活動を含むFDの取り組みなどが各大学で行われ、それらを含む活動の自己点検・評価結果が公表されている。とは言え、3大学それぞれの調査項目や調査方法はかなり異なるものであり、それらの既存の取り組みと新たなシステムとの関係をどう整理していくのかなど、おそらく前例のない課題に直面していると言える。例えば、今回のIRセンターが構築しようとしている「質保証システム」では、共同実施部分に対する教育に対象を絞ったある意味で独立した「質保証システム」の機能と、各大学毎に行われている既存の質保証システムのそれぞれに対してデータを提供するような従属的な機能の混在したような形が必要ではないかという基本的な問題と共に、それと連動して、仮に共同実施科目の授業評価アンケートで3大学統一の様式を用いる場合、各大学の既存の取り組みとの継続性とどう折り合いをつけるのかという極めて具体的な問題もある。また、京都府により提供される共同実施の校舎への大量の学生の移動に伴う取り組みだけに、交通問題も含めた教育環境整備の課題と結びつけた調査も視野に入

れる必要がある等、本取り組み固有の問題もある。一方、センター名にも現れているように、当初からIR手法の導入を視野に入れ、具体的にはIRコンソーシアムとの連携の可能性を検討対象としていたため、その中心的な役割を果たしている同志社大学と大阪府立大学への視察を行ってきた。

ここでは、視察そのものの報告というよりは、そもそも、3大学の機構として考えられる、あるいは考えるべき質保証システムについて、「質保証」の考え方に立ち返りながら、視察調査等で明らかになってきた、IRコンソーシアムに対する考え方や検討すべき問題点を示し、今後のIRセンターの取組みについての課題等について述べる。

1. 質保証の考え方について

教育の質保証という場合、まず保証の中身である教育プログラムの目標が掲げられていることが前提となる。3大学の教養教育共同実施に関する事業の目標として明文化されたものとしては、本機構発足以前の平成23年10月14日の教養教育部会で再確認された「教養教育共同化にあたっての視点・目標」

①共同化によって教養カリキュラムの選択幅を拡大し、一大学では対応できない学生の多様な関心・教育要求に応え、様々な角度から総合的に物事を観察し適格に判断できる能力と豊かな人間性の涵養をはかる。

②共同化によって三大学の学生・教員の交流をはかり、下鴨・北山地域における新しい学生のライフスタイル、大学像を構築する。（平成17年9月28日中間まとめ）

があり、その後に起こった未曾有の大震災と原発事故により長期間続くと思われる「震災後」と呼

ばれる状況の下で、教養教育の新たな意味が付加されたり、「京都学」等の連携による新設科目など、追加すべき要素があるとしても、基本点は①②に集約されている。今後、これらの事業主体側の目標に呼応して、教育を受ける学生の立場からの学習目標を提示して、学生自らの自覚を求めることが、質保証システム構築の第一歩となるであろう。その上で目標の達成度を調査し、そこから、問題点の抽出、課題等の認識、必要な改善計画の策定等に結びつけ、その結果をプロセスも含めて透明性を持って開示することが求められることになる。その場合も、機構独自の問題と各大学それぞれの問題を切り分けるなどの整理が必要なこと等が、既存の質保証システムとは異なる点である。

2. IRの考え方とIRコンソーシアム調査について

IR (Institutional Research) は、米国の大学に由来し、教育、管理運営、財務を含むデータの収集・一元管理により総合的な経営判断に用いられている包括的なデータバンクと考えることができる。日本の大学では、この間、国公私立の枠を越えて教学IRの先駆的な取り組みを行って来た北海道大学、大阪府立大学、同志社大学、甲南大学を中核としてIRコンソーシアムが設立されている。そこでは、日本の大学の既存の質保証システムを「質保証の第一ステージ」と定め、教学に特化したIR活動により、単位の実質化や学生の学習時間の確保に結びつける教育環境整備を意味する「質保証の第二ステージ」へすすむためのシステム (IRiS : アイリスと呼ばれる) を参加大学に提供するとしている。このシステムでは、例えば、学生調査を新入生と上級生の2段階で行うことにより、その間の比較による教育効果の評価が可能になっていて、匿名性を確保した上で学生の個人追跡調査の仕組みも用意されていること。また、日本のすべての大学で共通に利用可能な学力調査科目として英語を採用し、設問にはCEFR

(セファール : Common European Framework of Reference for Languagesの略称で、EU諸国で広く使われ始めている語学レベルの指標) を取り入れていること。その他の設問についても、10年に及ぶ国内の学生調査による検証を経たもの (JCIRP) が利用されている等、大学間の相互比較のためのベンチマークに要求される標準性が担保されていること等を主な特徴としている。コンソーシアムに参加した大学には、こういったことを可能とするツールや種々のサポートが提供される。

IRコンソーシアムを3大学の質保証システムとの関係で見ると、IRコンソーシアムはあくまでも大学単位での加盟とその単位でのシステムを提供するものであり、共同実施部分に的を絞ったような質保証システムに直接利用することはできない。さらに、教養教育は初学年での履修が中心となることや、共同実施科目に英語は入っていないことにより、新入生調査と上級生調査を組合せることや、ベンチマークとしての利用等の「第二ステージ」としての特徴を生かすことがそのままでは困難であることが分かる。

3. 今後に向けて

教育IRセンター発足直後からのIRコンソーシアムとの連携についての調査では、各委員に戸惑いも多かった。現時点で考えれば、それは当然のこと、最初から第二ステージへ上がろうとしていたことになる。今後は、第二ステージも視野に入れながら、まずは、着実に、第一ステージの構築を開始していくことが課題であろう。上述のように、IRコンソーシアムとの関係は、各大学単位での検討事項となるが、併行して、機構として、コンソーシアムが提供するIRの手法や考え方と、3大学間連携の取り組みにおける質保証についての新しい経験を付き合わせながら情報交換を行うことができれば、双方にとって有益な関係が築けるのではないだろうか。



教養教育院の視察から

藤井 陽奈子

2013年2月27日水曜日の9時30分より名古屋大学教養教育院を視察した。訪れたのは、リベラルアーツセンターに所属する京都工芸繊維大学教授大谷芳夫氏、同大学学務企画室長田中辰次氏、そして藤井の3名である。

■教養教育院設立の経緯

1. 全学共通教育

平成5年に教養部を廃止し平成6年4月より従来の一般教育に代えて各学部に通ずる基礎教育及び教養教育を全学共通科目とし、高度な専門性と豊かな人間性の涵養を目的とする新たな教育を実施した。この管理運営の主体は、学部等から選任された委員で構成された全学四年一貫教育委員会（後に全学教育委員会）とその下に置かれた四年一貫教育計画委員会及び共通教育実施運営委員会（後に共通教育委員会に統合）による委員会方式を採用した。

2. 名古屋大学学術憲章と組織改革

21世紀における基幹総合大学としての「新しい時代にふさわしい学術活動の発展」を目指し、「名古屋大学アカデミックプラン」をまとめ、その基本理念のもと平成12年2月に名古屋大学学術憲章を制定した。さらに、縦断細分型組織（部局組織：既存の学問領域の継承や発展にあたる領域型と新たな学術分野を創造する融合型とで構成）と横断包括型組織（全学共通組織）の二次元的組織体制を基本構造とした。平成13年4月に、新たに大学院環境学研究所（文理融合型）を、平成15年4月に大学院情報科学研究科の創設と大学院国際言語文化研究科の拡充改組が行われた。そして、研究拠点大学の全学研究組織として高等研究院を、教養教育の重点大学の全学

教育組織として教養教育院を平成13年12月に設置した。

■目標

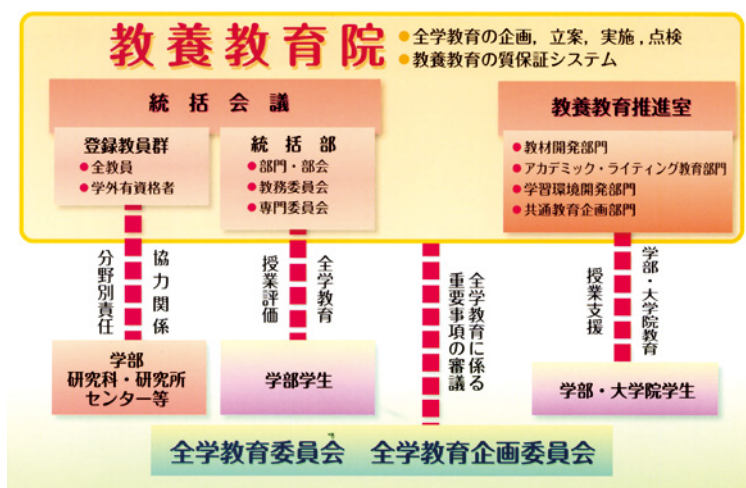
名古屋大学の教育の基本目標は「自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像性に富んだ勇気ある知識人を育てる」である。これを実現するための全学教育の基本的な目標は、1. 総合的な判断力と思考力を培う、2. 学生の主体性と学ぶ意欲を育む、3. 人間性を育むコミュニケーション能力を培う、4. 学部間に共通の基礎学力を培い探究心を養うである。

■役割と特徴

従来の調整機能にとどまる委員会方式の運営を改善し、教養教育院は、全学教育に関する企画・立案・実施および評価のヘッドクォーター（司令塔）として活動している。

特徴は、各学部・大学院の全ての教員が参加し教

全学教育のしくみ



全学教育の科目とその内容

基礎科目	全学基礎科目	初年次生を大学教育へ導入し、自立した学習能力を身につけるとともに、文・理に共通した基礎的学力や技能を養う科目
	基礎セミナー	多面的な知的トレーニングによって、コモンベーシックとしての読み、書き、話す能力の涵養を図るとともに、真理探究の方法と面白さを学ぶ科目
	言語文化	専門的学習のツールとして外国語の能力を高め、異文化理解を深めて、国際社会に相応しい教養を育む科目
	健康・スポーツ科学	健康に関する自己管理能力、生涯スポーツの基礎となる技能の習得、スポーツを通じたコミュニケーション能力やリーダーシップを育む科目
	文系基礎科目	人文・社会科学系分野の学問体系を認識するとともに、自主的判断能力を培う科目
	理系基礎科目	自然科学系分野の学問体系を認識するとともに、自主的判断能力を培う科目
教養科目	文系教養科目	人文・社会科学系分野の諸現象について、それらの諸現象を学際的、総合的に分析、把握する能力を育むとともに、他の学問分野との関連性について理解する科目
	理系教養科目	自然科学系分野の諸現象について、それらの諸現象を学際的、総合的に分析、把握する能力を育むとともに、他の学問分野との関連性について理解する科目
	全学教養科目	専門分野を問わず、豊かな人間性を育み、総合的判断能力を涵養する科目
	開放科目	学生の自主的で多様な学習意欲に応えるため、学部等が開講する専門系授業科目のうち、他学部の学生の受講が可能であり、かつ、有意義であると認めて全学に開放する科目

養教育（全学教育）を実施していることである。この全学教員が参加する全学教育科目は、教員自身の専門性を活かせるようにテーマを設定している。また、平成21年度からは英語教育の充実を図るため、アカデミックイングリッシュとして課外学習教材にeラーニングを導入している。

特に全学教育における基礎科目の基礎セミナーは開講数が非常に多いため、学生は履修登録時にシラバス上の各担当教員が設定したテーマを参考に、履修登録するクラスを選択する。基礎セミナーは、学生の読み、書き、話す能力の涵養を図ることを目的とする科目であるため、教員はティーチングアシスタントを配置し学生の自主性を重んじる授業運営を心がけている。

学生の満足度が高い講義として全学教養科目のひ

とつに「名大の歴史をたどる」がある。この講義の最終回は名古屋大学の総長が行い、全学公開となることが特徴である。

他方、教養教育院のホームページには、各教員が行う1分間の授業内容の紹介など、教養教育院の関係者だけでなく学生も共に参加して作る工夫が見られる。そのようなホームページの工夫は、名古屋大学を目指す高校生に向けられたものである。

■今後の課題として

教養教育院では、日本語の作文力を養い強化することと英語力の強化を挙げている。その英語力の強化に加えて、2年生後半から学生が個々の専門に移ってからの英語力の維持をどのようにしていくかが課題として浮上する。

この視察を振り返ると、山本一良教養教育院長の次のようなお話が特に印象的だった。

学問をとおしているいろいろなものを見ることで、視野を広くし複眼的なものの見方を学生には身につけてほしいし、その身につけた見方を自身や社会に役立ててもらいたいと望まれている。

こうして教養教育院の視察により知り得たことは、京都三大学の共同教養教育を構築していく上で学ぶべきところが多い。

最後に、名古屋大学教養教育院の山本一良院長、中濱定美主幹ならびに事務室の方々に、今回の視察の対応と教示への感謝を申し上げるとともに、厚く御礼申し上げたい。

次には、本年3月26日に筑波大学への視察が予定されている。

活動計画



京都学について

上田 純一

リベラルアーツセンターでは、現在、「京都学」分野の新たな教養教育科目として「京都学の現場から」（仮称）を検討している。

これは昨年の6月13日に開催されました三大学連携推進協議会教養教育部会からの懸案・引き継ぎ事項を具体化するもので、「三大学にまたがる学問分野の広さを生かし、単独の大学では実現困難であった、学部・大学の垣根を超えた学際的な科目を構想する」という観点から、すでに開講されている「京都学」科目に加えて、新たに「総論的」科目の設定を図ろうとするものである。

以下、今年度までの検討内容について報告する。

【名称】

「京都学の現場から」（仮称）

【内容】

「京都学」の総論的科目として、能・狂言、茶・酒・織物・和紙、デザインなど伝統産業・先端産業・芸術・観光などの現場で活躍する方々を非常勤講師として雇用し、講義のみならず現場見学なども重視した体験型学習科目とする。

【形態】

講師は每期5人程度を非常勤講師として雇用する。講師は1人3回程度の授業を受け持ち、内1回は学外の見学などを含めた内容構成にする。

【授業規模】

現場見学などの制限から当面は30人程度の規模でスタートする。

【開講時期および時間枠】

準備などの期間も考慮し、開講は後期から、当面月曜午後5コースの枠を使って行う。

以上の内容については、今後更に検討すべき点も多く残されている。引き続き諸賢のご協力およびご理解のほどを宜しくお願いしたい。



IR 準備調査

石田 昭人

教育IRセンター（E-IRC）の活動は当初は3大学担当者（医大：上原センター長、工織大：大倉、府立大：石田）で行い、3月1日からは専任教員として着任した児玉を交えて行った。具体的な活動については担当者間で議論を重ね、以下の項目について調査・検討を実施した。リベラルアーツセンター（LAC）との連携については毎週のセンター長会議を報告・検討の場とした。また、大学IRコンソーシアム（IRコンソ）の関連事項については本機構全体で議論を行い、大阪府立大学と同志社大学の視察調査を行った。

1. 3大学連携教養教育のIR活動と密接に関連する事項の洗い出し

本年度の調査活動は26年に開始される3大学連携教養教育のIR活動（E-IR）における調査と密接に関連する事項の洗い出しから着手した。E-IRの円滑な実施には開始までに具体的な活動指針を構築しておくことが不可欠であり、その第一歩は先例研究である。そこで、大学IRコンソーシアムの活動について調査・研究を進めた。一方、E-IR調査開始後には対象となる調査開始前のデータの収集・蓄積が必要である。そこで、シラバスや成績などの教務情報管理状況、授業評価、卒業生調査、および、新入生調査について3大学の現況を調査した。現況調査の結果、府立医大と府立大では系統的な新入生調査が実施されていないことが判明したため、今後の議論・検討に向けて、参考となる他大学の事例を可能な限り収集・分析した。

2. 事項別資料の収集・分析と課題検討

1) 大学IRコンソーシアム（IRコンソ）について

IRコンソの具体的な活動内容と設立に至るまでの経緯に関する調査を行い、事前に資料を収集したうえで加盟に際しての諸課題を洗い出すとともに、視察調査で詳細な質疑を行い、回答を得た。その結果

をもとに、3大学内で検討を行うための概要資料を作成した。

2) 3大学における教務情報の管理状況

3大学はそれぞれ独自の教務情報管理システムを運用しており、3大学をまたぐ教務情報の管理・交換が連携教養教育における重大な課題となることは容易に想像できる。3大学のシラバスを比較したところ、様式や内容の質・量はもちろん、作成・アップロードシステムも大きく異なることが判明した。さらに、E-IRにおいては科目間の成績相関分析を行うことが予想されるが、3大学をまたぐ分析については早急にシステムの連携法を研究する必要があることが判明した。

3) 3大学における授業評価

授業評価と卒業生調査は3大学ともに実施していたが、授業評価に関しては工織大のシステムが最も充実しており、府立医大はカリキュラムの大幅変更を控えていることもあって今後の検討待ちの状況であった。各大学ともに、連携教養教育だけを独立させるか、専門科目と統一するかといった検討が必要と思われる。

4) 3大学における新入生調査

卒業生調査は認証評価の関連から3大学ともに実施していたが、新入生調査に関しては工織大のみが系統的に実施しており、府立医大と府立大は実施していないことが判明した。新入生調査に関しては、3大学ともに、その必要性や意義について学内にかなりの温度差があることが推察され、今後、他校の先例をもとに議論を深めていくことが求められる。

5) 他大学における新入生調査と初年次教育調査

法政大、東洋大、東工大、福井大、お茶の水女子大、福岡県立大、川崎医療福祉大、室蘭工大、大工大などの新入生調査票と河合塾の調査結果を入手し、特徴を分析・整理した。

「新たな教養教育」に想うこと

林 哲介

あの3.11の地震・津波からもう2年が過ぎた。とりわけ福島原発の崩壊は、私たちの生活意識の奥深くにまで響く重い問いを投げかけた。いつのまにか惰性的に安全神話の傘の下に安住していたのではなかったか、経済成長をあたりまえのこととして目先の利益や安心だけに目を奪われていたのではなかったか。そういった自戒の気持ちを多くの人々が抱いたし、マスクミヤ学者や、方々からこのような声が湧きあがった。しかし、あれから2年経った今、このような議論が急速に希薄になってきていて、そのことにむしろ深刻な危惧・不安を感じてしまうのである。教養教育の課題を考えると、この危惧から目をそらすことができないと感じている。

ひとむかしの教養教育はというと、個々人が高い学識を身につけて自己を陶冶する、文字通り個人の人格の問題であったが、そのような教養がカビ臭くなり若者たちの心に響かなくなってもう久しい。しかし一方、最近いるんな人たちが強調する「グローバル化社会の不透明な時代に、力強く社会に貢献していく能力」を育てるといっても、それだけでは浅薄で“豊かな人間性”には及ぶべくもない。

不安感を多少なりとも克服できるとしたら、その鍵は、人々が日々の生活に追われながらも近視眼に終始せず、人間社会、地球世界の50年先、100年先を考え描き、多くの人々と想いを交わすことができるかにあると思う。そのためには二つのことが必要になる。一つは私たち皆がいつも科学的であろうとすること。何が正しく何が真なのかを絶えず考えることを習慣とすること、そして楽しみとすること。そしてもう一つは、自分たちの身の回りの利益・安全・安心だけでなく、社会の全体、世界の人々のことに想いを馳せる感性をもつことだと思う。

3大学で取り組む「新たな教養教育」というとき、目新しい思いつきの内容や方法を用意することではない。様々な将来への期待や不安を持つ学生たちが、社会や人間の豊富な課題を科学的に、そして目いっぱい感性で考え議論する場をどれだけ多く持ち、その価値と面白さを体感するか、ここにこれからの取組の環がある。そのため工夫は、3大学の資源を持ち寄ることで多彩に展開できる。これが、これから始める我々の教養教育への期待であり決意である。

林 哲介 はやし てつすけ

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員 京都工芸繊維大学副学長

総括コメント

高松 哲郎

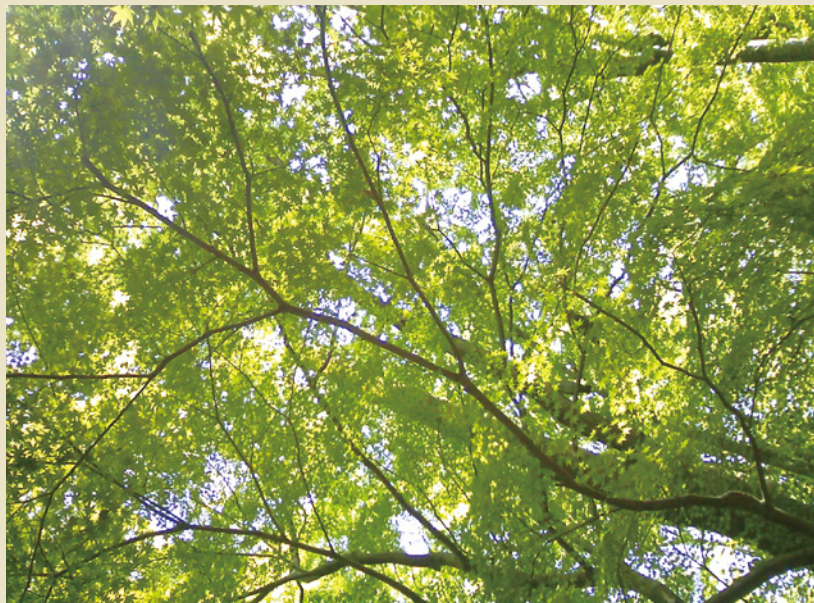
三大学の教養教育共同化にとって、平成24年度は特筆すべき年であったと思う。それは今後三大学教養教育の共同化における運営の中心となるべき京都三大学教養教育・研究推進機構が発足したからである。もちろんこれまでも三大学からの委員によって話し合いがもたれてきたが、何となく少し距離を置いた会議であった。24年度に入ってまず三大学の副学長会議が開催され、教養教育共同化の考え方や共同化する授業科目の設定とともに、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業への申請を検討した。この推進事業に採択されることによって、予算的にも裏付けられた教養教育・研究推進機構が発足し、あり方など大きな方向性が示されたことがその後のプロセスを進めやすくした。申請書をおまとめいただいた府立大学の築山副学長に感謝申しあげる。さらに、はじめから時間が足りないことから危ぶまれていた専任教員の選考も、教授クラスの採用では少し躓いたが、若い優秀な教員2名を得て順調に進んできたと思う。発足までに多大な準備がなされていたとはいえ、採択後の歩みは大変早く、会議の多さには閉口したが、目標に向かって進んだ6ヶ月間であった。

10年以上前に、今後京都府立医科大学は健康・福祉・環境関連科学の総合化を目指すヘルスサイエンス系大学を目標とし、教養教育の内容も選択の幅を広げる必要があるとの議論があり、三大学の教養教育共同化に参加することになった。しかし、理念や価値観、また制度も異なる京都府立大学や京都工芸繊維大学と一学年とはいえ一緒にやっていくことのアドバンテージ、教養教育・研究推進機構と各大学組織との棲み分け、IRセンターなどについては、これからも討議やアピールを行っていかねばならない状況だと思う。これらを乗り越え、規模がさほど大きくない大学における教養教育システムのさきがけを目指していきたい。

高松 哲郎 たかまつ てつろう

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員 京都府立医科大学副学長

資料編



共同教養教育の理念

三 大学教養教育の理念



社会の枠組みの急激な変化や東日本大震災・原子力発電所の事故により、人間の生き方、あり方がその根幹から見直しを迫られています。

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の国公立三大学の連携・共同の諸取組はすでに10年近い歴史を持っており、教養教育についても、平成17年に「中間まとめ」として、現在の取り組みの骨格にあたる内容がまとめられています。今回、それを土台に、上記のような時代の転換点にいるという認識を踏まえ、事業の基本的な方向性を決めました。

本事業を活用して教養教育の共同化を行うことにより、「新しい時代の要請に応じた教養教育カリキュラム」の構築を目指します。そして、それぞれの大学の特徴・強みを生かしたカリキュラムを提供することにより、学生の多様な関心・教育要求に応え、総合的に物事を観察し的確に判断できる能力と豊かな人間性の涵養を図っていきたいと思います。

共同教養教育の目標

三 大学における教養教育の目標



グローバル化の進展などによって、社会全体の枠組みが大きく、かつ急激に変化しています。また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災は多くの尊い命を奪い、国民全体が幸福感や社会関係のあり方を深く問い直す状況が広がる一方、「人を思いやる心」や「人と人との絆の大切さ」を社会に再認識させるものとなっています。

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の国公立三大学の連携・共同の諸取組はすでに10年近い歴史を持っており、教養教育についても、平成17年に「中間まとめ」として、現在の取り組みの骨格にあたる内容がまとめられています。今回、それを土台に、上記のような時代の転換点にいるという認識を踏まえ、事業の基本的な方向性を決めました。

また、共同教養教育カリキュラムの構築の取組の成果を「京都モデル」として「大学のまち・京都」から広く全国の大学に向けて発信し、市民的教養に関わる社会への提言に取り組んでいきたいと考えています。

共同化した教養教育カリキュラムでは、専門教育を支える幅広い基礎知識の獲得のほか、現代社会における市民性の涵養という観点に照らした「知の共通基盤」、「人間性の基礎」を培うことを目的とし、具体的には、①異なる価値観や視点を持つ他者と協働する力としてのコミュニケーション能力及び相手を思いやる心、②自ら問題を発見し、それにコミットするとともに、「正解」のない問題についても、学際的な視点にたち、多様な見解を持つ他者との対話を通して自身の考えを深め、解決に向かって行動する能力、③グローバルな局面で、文化や言語を異にする他者と交流し協働する能力を備えた人材を育成することを目標としています。

共同教養教育科目の授業内容

三 大学教養教育科目の授業内容



先端的な教養教育の開発や「新しい時代の要請に応じたリベラルアーツ科目」、「学部・大学の垣根を超えた学際的科目」等の企画・実施します。

これらについては、三大学の教員が協力の上、リベラルアーツセンターが中心となって検討しています。平成26年度の開講に向けて、共同化科目等の名称について具体的な準備を進めています。

なお、想定される取組の一部は次のとおりです。ここで開講される科目は、すべて学生が自大学の授業として受講できます。

1. 三大学のリベラルアーツ系科目の共同開講

三大学それぞれが提供するリベラルアーツ系科目を、新設の共同校舎で開講します。スタート時点で、前・後期合わせて60科目を予定しています。これらは、広い視野と豊かな人間性を育てるための基本的な科目群であり、共同化の中心的なカリキュラムとなります。

2. 京都学や人間学など学際的科目の開講

三大学にまたがる学問分野の広さを生かし、単独の大学では実現困難であった、学部・大学の垣根を超えた学際的な科目の開講をめざします。

(想定科目例)

- 京都学（京都の歴史、文学、農林業、伝統産業と先端産業などを、体験的なプログラムも含めて学ぶ。26年度開校予定）

その他に、人間学、生命科学、健康学、心理学など、新しい科目の開講の可能性を検討していきます。また、社会の変化に対して自主的、積極的に対応できる能力を獲得させるため、三大学の学生が共に学ぶゼミナールの開講を検討します。

3. 異分野・地域連携教育の実施

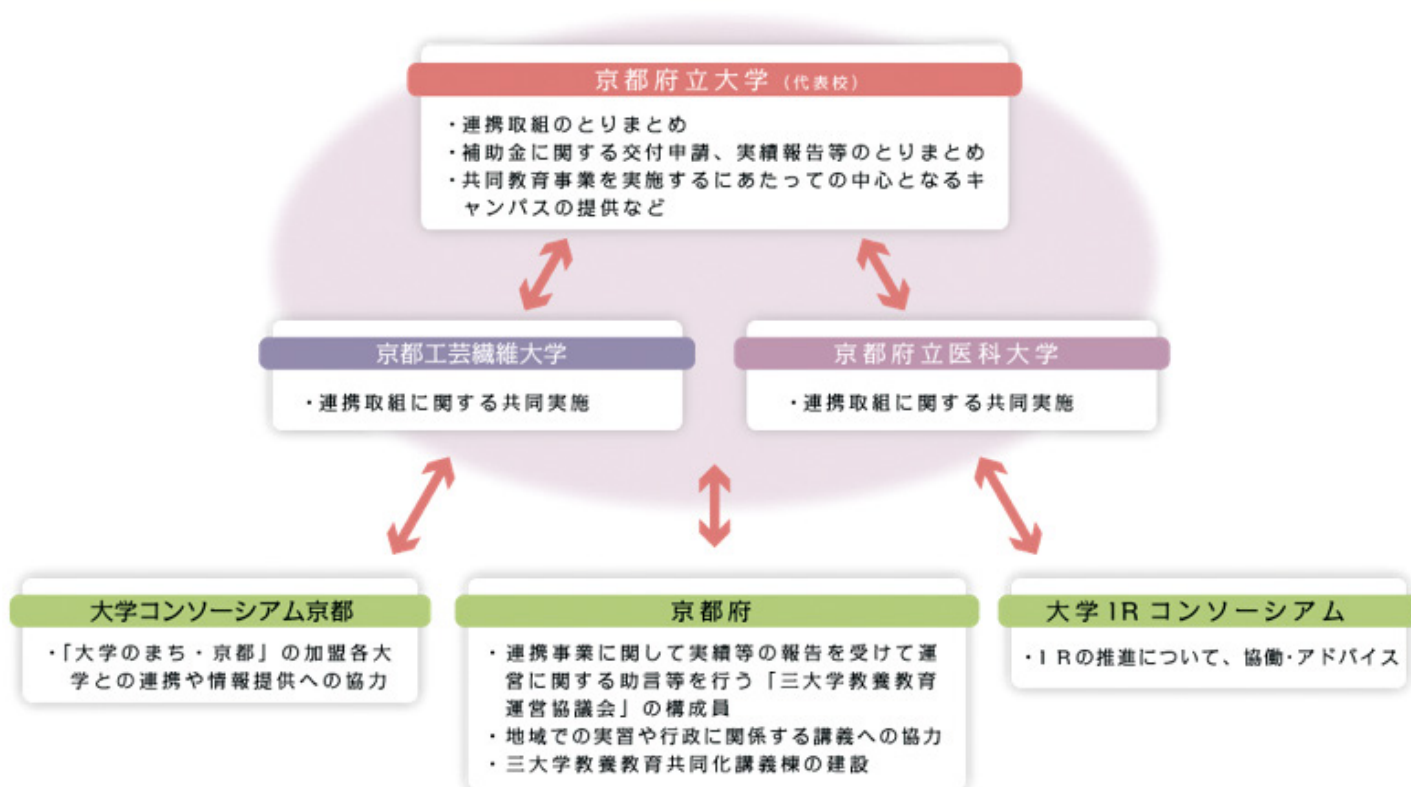
学術・文化・伝統工芸・地場産業等、京都の特質を生かし、地域に密着した生活の技術・思想・倫理や人間と環境の関係、地域の持続可能な発展などをテーマとした、地域の団体・機関と連携した演習の開講を検討します。

4. 豊かな国際感覚を育成するための外国語授業の実施

ひきつづき、各大学において、少人数・クラス制の授業により質の高い語学教育を進めながら、共同開講の利点に応じた科目開設を検討します。

大学等間の連携体制と連携取組の実施体制

機構の構成について



京都三大学教養教育研究・推進機構組織図

運営委員会

- ①三大学担当副学長及び②リベラルアーツセンター及び教育IRセンターの全教員で構成
 ※必要に応じ、委員以外の者を出席させて説明又は意見を聴くことができる。

- ・機構に関する重要事項の審議
- ・共同化する教養教育課程全体の重要事項の調整

リベラルアーツセンター

企画・実践機能

・外部から採用



・3大学現教員



教育内容開発

- ・三大学教養教育共同化の目指すべき教育理念の深化
- ・構築・先端的な教養教育の開発や「新しい時代の要請に応じたリベラルアーツ科目」、「学部・大学の垣根を超えた学際的科目」等の企画・実施・専門教育や大学院でのリベラルアーツ科目の実施検討
- ・社会への発信（講演会、シンポジウムの開催等）
- ・現代の大学教育において求められる教養教育についての提言（教養教育「京都モデル」の発信）
- ・主に教養教育の講義（学生への教育の実践）

教育IRセンター

質保証機能

・外部から採用



・3大学現教員



質保証システムの研究開発

- ・IRの視点からの教育データの分析
- ・共同実施事業固有の評価項目・分析手法の検討
- ・科目ナンバリングなどカリキュラムの体系化に関する研究
- ・既存の質保証システムとの連携の研究

研究成果のフィードバック

- ・FDの企画・実施（教育手法の向上等）

事業計画、実績等の報告



運営に関する助言等

三大学教養教育運営協議会

京都府、学識経験者、文化人等

京都三大学教養教育共同化による 「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践

背景

地球環境の危機や一地域の変化が全世界の人々に影響を与えるほどのグローバル化の進展により、社会全体の枠組みが大きくかつ急激に変化している。

加えて、東日本大震災は多くの尊い命を奪い、生活や産業に深刻な打撃を与えるとともに、それに併発した原子力発電所の事故は暮らしとエネルギーの問題を投げかけるなど、国民全体が幸福感や社会関係のあり方を深く問い直す状況が広がっている。

また一方、被災地では、住民同士の助け合いや国内外からのボランティアによる救援・復興活動が展開されており、「人を思いやる心」や「人と人との絆の大切さ」が再認識されている。

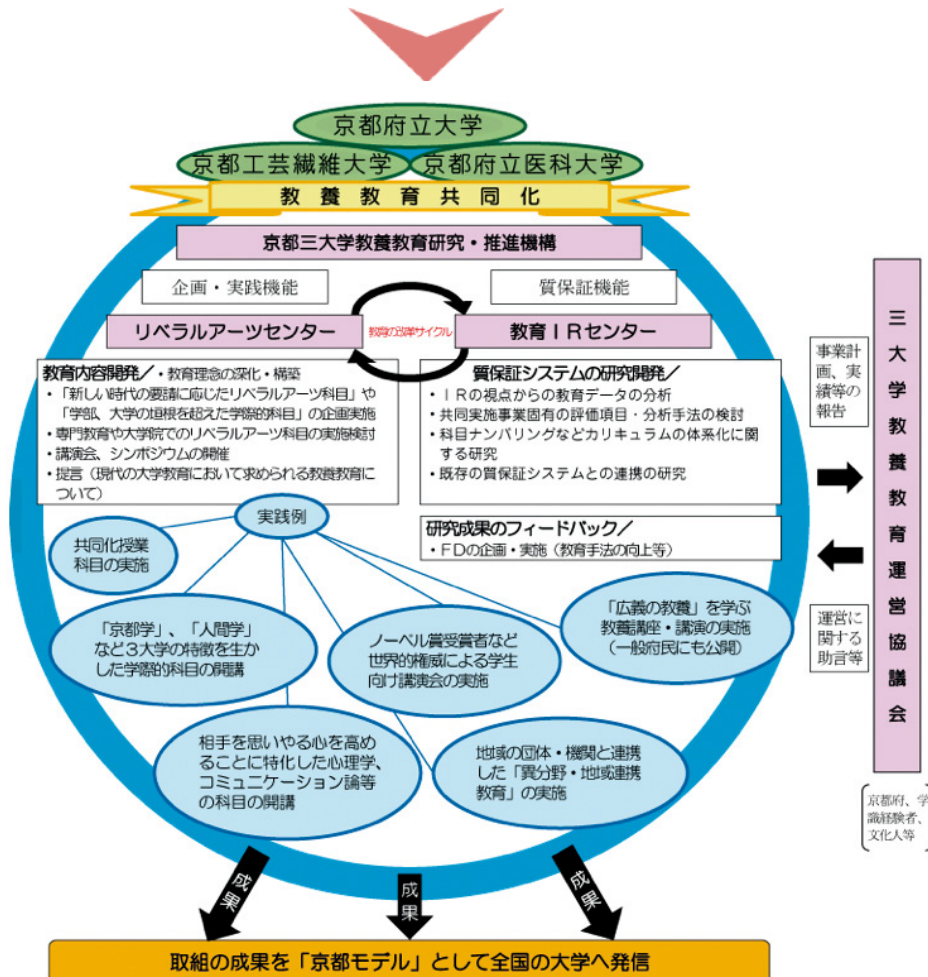
取組コンセプト

国公立三大学の教養教育カリキュラムを「共同化」し、それぞれの大学の特徴・強みを生かした質の高い、「新しい時代の要請に応じた教養教育」を実施する。

人材養成の目標

次の1～3を備えた人材を養成する。

- 異なる価値観や視点を持つ他者と協働する力としてのコミュニケーション能力及び相手を思いやる心
- 自ら問題を発見し、それにコミットするとともに、「正解」の存在しない問題についても、学際的な視点に立ち、多様な見解を持つ他者との対話を通して自身の考えを深め、解決に向かって行動する能力
- グローバルな局面で、文化や言語を異にする他者と交流し協働する能力



施設のご案内



「北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告」より



1階には最大100~200名収容の講義室が計6室、食堂など充実の設備が予定されています。

▲三大学教養教育共同化講義棟 完成イメージ図

構造・階数：鉄筋コンクリート3階建て

延べ床面積：9,100㎡



Google Mapsより

基調講演「共感する力、創造する力」－時代が必要とする教養－

昭和女子大学学長 坂東 真理子

はじめに

私も30年以上公務員をしております、最後は、かつて京都府で副知事をしていらした、佐村さんが現在局長をしていらっしゃる、内閣府の男女共同参画局長の初代局長を務めたりしました。法律や制度をつくったり、予算を取ってきいたりするのが社会をよくする大事な仕事だと思って、一生懸命仕事をしてまいりました。

しかし、その後、2004年から、東京の世田谷の三軒茶屋駅という、渋谷から5分ほどですけれども、その近くにあります昭和女子大学に勤めておまして、幼稚園から大学院までございますが、そうした付属校を合わせますと、7千人余りの学校で仕事をしております。

制度や枠組みをつくるこの仕事は、もちろんとても大事なのですが、それは舞台づくり、舞台の書き割りをつくる仕事であって、いちばん大事なのは、舞台上で演じる人、どういう人を育てるかということです。教育は、そういう意味で本当に大事な仕事なのだと痛感しておりますが、あつという間に8年以上が過ぎてしまいました。

昭和女子大学は、実は戦前からある大学で、戦前は専門学校だったのですけれども、良妻賢母という言葉を標ぼうしております。特に世の中で、社会で、自分が直接仕事をして役に立つよりは、立派な仕事をする男性を、よき妻として支える、補佐役が務まる、そして、立派な子どもを育てる、賢い母親になりましょうという教育をする中で、教養のある女性を育てようということを標ぼうしてきた大学です。

中でも、いちばん強いのは、当時は国文科。いまは、日本語日本文学科という言い方をしておりますけれども、文学系が強いので、それに比べると理工系、あるいは社会科学系は、ちょっと弱いかなという大学です。

無用者の系譜と教養人のイメージ

日本の大学も含めまして、文化の背景には、『無用者の系譜』という本があったのを覚えていらっしゃる方も多いと思いますけれども、唐木順三さんという方が、私がまだ高校生ぐらいのときにお書きになった本です。

在原業平にしても、吉田兼好にしても、鴨長明にしても、みんな社会の中で、プレーヤーとして活躍した人たちではなくて、ちょっとはみ出して端っこにいるような人たちが日本文化の主流を成してきたのです。

例えば、在原業平なんかは、「ほぼ才学なし」で、貴族としての才学、漢材がない、学識がない、貴族として当時の官僚を務めるためには、漢文の素養がいちばん大事な能力だったのに、彼は天才的詩人ですけれども、あまり漢詩は上手ではなかったのでしょうか。漢文を上手につくることができなかったのだらうと思います。

そういった主流の学問と、世の中の役に立つ国家有用の材になる学問と、無用者の系譜、自分自身が心を満ちて、有意義な人生を送ることができるのが教養人であり、世の中のことや人のことなんて、そう深く関わらない方がいいんだと、むしろそういったものにとらわれないで解脱しているような状況というのは、やはり仏教の影響が背後にあるのかもしれないけれども、ものに執心してはいけない。そういったものからとらわれないような状況、そして、自然を愛し、人の情けを解するけれども、深入りはしないというのは、教養人のイメージとしてあったのではないかなと思います。

その系譜は、例えば和魂洋才ではありませんが、社会で活躍するとき、明治以降は英語ができなければいけない、数学ができなければいけない、法律が使えなければいけないとか、そういう表芸の学問と、直接は役に立たない無頼者の文学者の人たちが没入していたような文化と、その二つの流れがあったような気が致

します。

いまは、そういった歴史的なことはさて置きまして、これからの21世紀、私たちが置かれている状況の中で、どういう人間を育てようとしているのか、その人間は、国家社会に有用である技術、知識、スキルを持っていると同時に、自分の人生を自分で楽しむことができる。あるいは、文化、人の痛みが分かるということを含めた、人間としての豊かさを持っている、その二つを調和する人を必要としているのではないか。

しかし、残念ながら、いまその国家有用の方と、無用者のケースの方、両方の教養が、少し並列して、十分に融合しないままに、教養ということについて語られているのではないかなという恐れを持っております。

グローバル化に直面する日本

いま、われわれ21世紀の日本が、いや応なしに直面しているのはグローバル化です。2010年に日本のGDPは、すでに中国に追い越されておりますけれども、おそらく日本は、世界の経済の中で、20世紀の後半（1980年代）のような存在感は、どんどん小さくなっていくと思います。

世界全体に占めるGDPの割合も、すでに1割を切っておりますけれども、それだからこそ、われわれが進出していくというグローバル化ではなく、日常の営みがグローバル化抜きにしては存立しなくなってきたというのは、好むと好まざるにかかわらず厳然たる事実ではないかと思えます。

自分たちが生活で使っているものがmade in Chinaであり、made in Thailandであり、ITサービスがインドのテクニシャンによって提供されます。原材料を世界中から輸入して、それを日本人が加工して、また輸出するというグローバル化ではなくて、もうすでに製品、あるいはサービスに伴って資本、あるいは人の交流が、いや応なしにどんどん進んでおります。

例えば日本の企業に勤めたとしても、今度のシャープがそうですけれども、台湾の企業から資本援助を仰がなければならない、あるいはラオックスのように中国の資本に買収される、おそらくそういったことが今

後どんどん増えてきて、その流れを押しとどめることはできないだろうと思います。逆に、日本の企業も、いまや商社とか製造業だけではなくて、サービス業の世界でも、どんどん世界へ進出しています。

例えば、公文という家庭教師の最大の顧客はインドであるという話がありますし、中国の高齢化に対して、日本から、たくさんの高齢者サービスの企業が進出を狙っているのだろうと思います。

そのように、国家有用の材と先ほど申しましたけれども、有用である対象は小さな日本という枠の中だけではなくて、グローバル化している世界において、自分がどれだけ役に立つ存在であるか、また、国内の人に対して、よき市民としてマナーやルールを守り、人助けをするというような資質が求められます。それに加え、広い目を世界に開いて、たとえ自分と言葉が違おうと、バックグラウンド、価値観が違う人に対しても心を広く受け入れて、いかに折り合って、協力して一つのプロジェクトをすることができるのかということです。

先ほどの、音楽なんかはいちばん典型的な例だろうと思いますけれども、スポーツの世界でも、ウィンブルドン現象と言われるように、プレーヤーは多国籍、むしろその場合には、英国出身の選手はいない、世界中からプレーヤーが集まってしのぎを削るのです。ウィーン・フィルにしてもベルリン・フィルにしても、アジア系の人たちが半分以上を占めていると言われます。そういった中で、日本の固有文化を大事にしていきたいと思います。これが、どの程度の説得力を持てるのだろうかということも、また新たな課題としてあるわけです。

グローバル人材に求められる 資質としての「体力」

そういった、ウィンブルドン現象が、スポーツの分野だけではなくて、芸術や学問、また経済の分野でも、どんどん起こっている中でプレーする人、あるいはリーダーは、こういった資質を持たなければならないのでしょうか。

特に、グローバル化というと、すぐにグローバル

リーダーというのが対語になっておりまして、日本は、グローバル化は進んでいるんだけど、グローバルリーダーが少ないので、もっと国連機関や多国籍企業のトップになれるような人材が必要だといわれます。

日本のいまの大学教育は、その人材養成機能を全然果たしていないのではないかという議論があります。私は、リーダーもさることながら、われわれミドルクラスの、普通の人たちがグローバルワーカーとして、どこでもプレーができるようになる必要があると考えます。その人達にとって、全ての基礎は健康と体力が基本になると思います。

環境がどんどん変わって、新しい刺激が入ってくると、いままでの価値観が通用しないときには、自分自身が変わり続けていく努力をしなくてははいけません。

「もういい、面倒だな」、「もう、まったく温泉にでも漬かって、日本文化を楽しんでいようよ」といったようなレイジーな人間は、グローバル化する社会では生きていけないのではないかと思います。

そして、そのエネルギーの基本になるのは、何といっても健康や体力です。それがあって初めて努力をする、あるいは行動をする、志を持続していくとすることができるのではないかと思います。

いま、日本の若い人たちが、「内向きになっている」とよく言われます。もちろんそういう人がマジョリティーですけども、中には青年海外協力隊のように、いろいろなボランティアとして途上国の発展のために一生懸命、汗水流している人がいます。

そういう人たちは、もちろん頭もいいかもしれませんし、志もあります。しかし、いちばん大事な資質は体力なのです。現地の人たちと同じようなものを食べて、同じようなところに寝泊まりをして、それでも病気になるまいと頑張ることができるための体力がグローバルな人材、必要とされる場で生き抜いていくうえで、不可欠なのだということを実感しております。

グローバル人材に求められる資質としての「知的好奇心」

二つ目が知的好奇心です。あるいは、それによって支

えられた学習習慣、論理的思考というように、だんだん積み上がってくるのではないかと思います。

知的好奇心というのは、自分の知らないことに関心がある、面白い。これも、鈍いと言いますか、面白がらない人というのが、いまどんどん増えています。インターネットで、知らない情報がすぐに分かるので、べつに自分から面白がったり調べたりしなくても、すぐに手に入るんだという中では、知的好奇心が、かえって擦り減っているのかなということを感じてしまいます。

どうしたら、その知的好奇心をかき立てることができるのでしょうか。実はこれは、教養教育の、さらに基礎の基礎になるんだと思いますけれども、中学生や高校生で、「ふうん、それで。何か面白いことがあるの」と、知的好奇心がなくて、根がどんよりしているような子どもたちが増えていくのを見ると、この先どうなるんだろうかと少し心配になります。

でも、心配しているだけではしょうがないので、知らないことを知る、知らないことが分かるということは楽しいんだ、面白いんだという体験をさせなければならぬのかなという気がします。

「ええ、どうしてこうなったんだろう」、「sense of wonder」、「不思議だな、なぜだろう」といったことを、小学生以前の段階から、もっともっとかき立てなければいけないと思います。そういうことを考えさせるためには、いきなりデジタルな情報に接してしまうのではなくて、現実の自然や人の温かさ、あるいは冷たさ、厳しさに触れるという経験を、もっとしなければならぬのではないかと思います。

個性や創造性を発揮する際には基礎が不可欠

そうした知的好奇心の上に、育まれる学習習慣も、日本ではこの20、30年間、本当にないがしろにされてきておりまして、東京の、たくさんのマンモス大学と言われるところの学生たちのうち、半分近くは、おそらくセンター試験で2科目、3科目しか取っておりません。自分の取らなかった分野の、例えば数学、化学、物理、世界史といったものは、「入試で自分は取

らなかったから関係ないんです」というように、小学生並み、中学生並みの知識しか持ち合わせていないような学生がたいへんな勢いで増えています。

全てを、ゆとり教育のせいにするような論評が盛んですけれども、ゆとり教育だけが悪いのではなく、受験勉強が人間性を阻害して心を傷つける、もっと伸び伸びと個性を發揮させましょうという社会のムードがあって、ゆとり教育が当時採択されたと思います。

「個性を大事に伸び伸びと」ということは、本来ならば、基礎をしっかりと勉強して、学習したうえでの個性であり、基礎的な知識を持った想像力だと思うのですが、残念ながら、いまの日本の過半数の高校生、中学生は、そうした基礎的な知識を身に付けていないままに、自分らしく、伸び伸びと能力を發揮したいという、夢ではなくて、幻想を持っている人がたいへん多いのではないかと思います。

私は、個性や創造性を發揮する際には、基礎が不可欠だと信じています。それは、おそらく先ほどのオーケストラの学生さんたちも、最初は指の動かし方、どういう音を出すか、基礎的なトレーニングを繰り返して、ようやく正確な音が出せるようになって、正確なメロディーを弾けるようになって、その上で心を込めて個性的な表現を付け加えていくのだと思います。

ぎいぎいという、まともな音階が出せない段階から、「これが個性です」ということはあり得ないはずです。それは、音楽の世界でははっきりと覚えております。スポーツの世界でもそうだと思います。しかし、学問の世界では、まだ基礎を身に付けなくても、個性や創造性を發揮することができるという誤解があるのではないかなと、たいへん恐れております。

高校卒業試験の提案

いま、高大連携ということがしきりに言われていますけれども、私がいろんなところで言っているのは、高校卒業資格試験をしてほしいということです。大層な試験を新たにする必要はありません。センター試験レベルでいいのです。

いい大学に入る場合には、センター試験では、ケアレスミスさえしなければいい、100点なんて軽く取れ

るというような試験ですけれども、あの試験で、20点、30点ぐらいしか取れないような高校生もたくさんいるのです。

また、大学進学率が高くなって、それが大学生の質の低下を招いていると言われますが、それでもまだ55%程度です。ひっくり返すと、45%以上の子どもたちが高校卒業だけで社会に出て行っています。

それで教育を受ける機会はなくなるわけですが、本人が頑張ればチャンスもまたあるのです。公式な教育を受けないで、必要最低限のことも知らないで、分数の割り算もろくろくできないで世の中へ行くのかなと。それは、とても恐ろしいことだと思います。その出口のところで、ある程度のレベルを要求することが、高校教育をもう一度活性化するのではないかと思います。

大学においても、それぞれ個性があって、それぞれの分野で知らなければならないことが多いので、共通の卒業資格試験などというのは、できないというのが一般的な意見ですけれども、それこそ教養のレベルでは、必要最低限身に付けておくべきであるといったベーシックな教養試験ということも考えなければならぬと思います。

大学に関しては、高校卒業資格試験ほど必要だと、私は熱心に主張しませんが、入り口のところは皆さんたいへん関心があって、どういう入学試験をすれば、いい人材を入学させることができるのかということについては熱心な議論が行われます。

それぞれの学校段階で必要なのは、入学試験ではなくて卒業試験で、出口で必要とされる教養や、必要とされる一番ベーシックなものというのは何なんだろう、せめてこれだけは身に付けてほしいというものを明示することが必要なのではないかなと思っております。

本をしっかり読める習慣の修得

そうした学習の基礎になる読書というのも、小説本まで含めても、ひと月に1冊、2冊しか読まない大学生とか、あるいは、高校時代に自宅学習時間が1時間以下、あるいは0時間という高校生が3割以上いるという状況を見ると、ちょっと考えさせられます。

そして、大学の授業は、15週間、30週間、そしてだいたい124単位とか、132単位ぐらいで卒業資格になるのですが、大学の1コマ単位を取るためには、その3倍に当たる自宅学習時間を想定して、単位を与えるというのが建前になっています。しかし、3倍の学習時間を必要とするような授業が、全国の大学の中で行われているのでしょうか。

特に、私が働いております私立の大学において、卒業させないということは、スポンサーである親御さんにとっては非常に心外なことですので、たいへんなクレームがきます。「なぜうちの子どもを卒業させてくれないのか」、「単位が足りないからといって、何で落第させるのか」と言われると思います。

そこを理解していただくことが必要なのですけれども、それでも私は、特に教員の方達には、1年生の1学期には厳しく試験の点数を付けてくれと。そして、必ず毎週読まなければならない本のリーディング・アサイメントの宿題を出してくれということをお願いしています。

教員に対して命令はできないのでお願いしております。それを実行して下さっているかどうか分かりませんが、少なくとも、90分の時間を聞いているだけで、出席点だけで、学生たちが自分の言っていることを身に付けたと思ったら大間違いなので、そのために、3倍の準備をするくらい授業をしてください、レポートを課してくださいと言っています。レポートの採点が大変だったら、ティーチング・アシスタントを付けます。でも、学生をあまりのんびりさせないでくださいということを、とても異端な意見ですけれども、繰り返し言っております。

特に本を読む習慣を身に付けさせる。私は本当に古い人間なので、活字で育ち、文字で表現するという文化に属しているのですけれども、いまの若い人たちは、文章を読むのがとてもしんどいんだけど、コンピューターグラフィックや造形、芸術的なもの、あるいは音楽を通じてのコミュニケーションというのはとても上手なので、もちろんそれも一つの教養、コミュニケーション能力として評価しなければならないと思います。

また同時に、やはり本をきちんと読める習慣。それに対して、頭が痛くなるとか、負担に感じないような習慣

を、学生のうちにしっかりと身に付けさせることが大事だと思います。そして、そのうえでのロジカル・シンキング（論理的思考）ができるということです。

大学をあらわす.acと.eduのちがひ

その際に、私は教員の方たちといつも議論しています。教員の方たちは、ご自分が研究者だと思っていられる方が多いですから、きちんとした理論を組み立てて、破綻のない説を構築する力がとても大事な能力であるとお感じになっていらっしゃると思います。いろいろな大学によってその割合は違いますけれども、少なくとも私の大学回りでは、研究者になる人は1割もいません。5%もいるかいないかというような状況です。しかし、教員は、自分のことを教員であるというよりも、研究者であると思いたい、思っていられる方が大部分だと思いますけれども、大学によって違うかもしれません。

私は、いつも笑い話で言っているのですけれども、おそらく、府立大学の方たちもそうだろうと思います。昭和女子大は、swu (showa women' s university) .ac.jp、acはアカデミーの略です。ところが、ご存じだと思いますけれども、ハーバード、あるいはスタンフォード、エール大学は、@harvard.eduです。エデュケーション機関です。エデュケーション機関として自校を見ていらっしゃる。教員は、まずエデュケーターであると。ティーチャーである、そしてリサーチャーでもあるというふうに認識していらっしゃいます。ところが、日本の大学の方たちは、研究者が本務でちょこっと教育をしていらっしゃる。

それこそフンボルト理論ではないですけれども、立派な研究者が、こんな研究をしているんだということをおっしゃったり、あるいは、その研究をしていらっしゃる後ろ姿を見せると、学生たちはおのずと触発されて、「おお、なるほど。学問の真意はこうして極めるのだ」と感動して、その道に入っていくというような、19世紀型のイメージをお持ちの方が、まだまだ多いのではないかと思います。

論理的思考力の重要性

私はもちろん、論理的思考も大学生で身に付けなけ

ればならない能力だと思いますけれども、それは、自分の理論を構築するためというよりは、考え方、文化、価値観、背景の異なる人たちを説得するときのツールとしてロジカルな、こうだからこうなんですよという積み上げをしていくことが共通理解を得るための土台になるのだと思います。

ロジカルパワーがある人は、論破する、論争に勝つ人でなくて、相手を説得できる人、納得させる人、納得させる力を持っている人なのだというような言い方をしております。論破して、けんかして、それで「勝った、勝った」と言っているのは、子どもの世界です。

現実の社会では、論破して、相手にやられたと感ずいていい気分になる人はいません。「そうだな、俺の言っていることもこの部分と共通しているな」というかたちで、お互いに折り合っていくことが必要です。その際、全然違った言葉や論理で、それぞれが自説を述べ立てていっても共通の理解というのは得られませんから、その土台になるのがロジカル・シンキングではないかと思っています。

ですから、健康や体力、そのうえに積み上げた学習習慣ですとか、論理的な思考能力という基礎を身に付けさせることが大学の非常に大きな使命であって、研究者でなく大学を卒業して社会人になっていく95%の学生にとっては必要不可欠な能力であり、教養なのではないかなと思っています。

あらゆる人に対して礼儀正しく接する

そして、社会人として生きていくうえで、いろいろなバックグラウンドのある人。特にグローバル化が進めば進むほど、宗教も生活態度、価値観も違います。そうした人たちに対して偏見を持たない、差別をしないで協力ができる。

差別というのは、自分では当たり前常識人だと思っている人が、他人の心を傷つけるような差別的な言動をします。「女性と男性って頭の構造が違うんだろう」、「女性にはこんなこと無理なんじゃない」など、全然悪気なく言っている言葉が相手を傷つけています。

例えば、アフリカ系の人たちやイスラム系の人たち

に対して、そんな常識だと思って何気なく言っている言葉が相手の方たちをぐっと身構えさせて、傷つけてしまうということがしばしばあります。

教養というのは、自分が楽しいとか、いろんなことを知っているというところでとどまるのではなくて、いろんな価値観やライフスタイルが、それぞれの等価値なんだということを全て受け入れるような広がりを持たなければ、狭い教養、狭いナショナリズムの教養は、かえって国を危うくするのではないかなと思います。

そして、むしろそうした知識とか価値観、美意識とか以前に、人に対して親切であるとか、悲観的な考え方をしないで、明るいものの見方ができる、積極的に物事を受け止めることができる、そして、あらゆる人に対して礼儀正しく接することができるのが教養です。

あらゆる人というのは、自分よりも社会的地位が下の人、あるいは年齢が若い、また豊かではないというような人たちを軽んじたり、ばかにしたりしないで、きっちりと対等に、丁寧に礼儀正しく接することができるのが教養だと思います。

物事をたくさん知っている、百人一首をいっぱいそらんじているということが教養ではありません。そうしたものを背景として、どのように人と接することができるかというのが人間として、これから求められる教養なのではないかなと思います。

もちろん、そうした教養だけではなく、直接世の中につながっていくためには、道具としての語学を使いこなせる能力も必要です。特に、グローバル・アーリーナ、多国籍企業ですとか、国連機関と働こうと思うと、グラデュエート・ディグリーを持っているということが、いまや必須条件になり始めてきております。

そういった要素ももちろん大事なのですが、グローバルに通用する人材というのは、先に申し述べたような教養を身に付けているというのがいちばん大事なのではないかと、私は思っております。

二つの教養を統合する「志」

そして、社会人として生きていくうえで、社会人基礎力、あるいは学士力にしても、社会から、大学を卒

業した人材に対するいろいろなリクエストがあるわけですが、専門的なスキルを持っているということ以上に、コミュニケーション能力を持っているということを要求されるようになってきております。

そして、そのコミュニケーション能力というのは、先ほどの、グローバルに通用する人材が持つべき能力と非常に共通しているところがあると思います。われわれの文化の中でだけ通用するような、相手の気持ちに過剰に配慮して、持って回ったような言い方や、直接言わないで、間接的で抽象的な表現をする人でなく、一般的な言葉で言える方が、賢い、学のある人です。

自分の体験を基に、ストレートにものを言う人というのは、教養がないのだという偏見もあるのですが、それは、古い時代のコミュニケーション能力観であって、これからは端的に、持って回った言い方をするのではなく、ストレートに、しかも具体的に、オリジナリティーを持って話をするべきでなければなりません。

もちろん、同じことを言うにも、洗練された言い方と、武骨で粗雑な言い方というのはあります。ですから、できるだけ相手にきちんと伝わるように、表現は洗練させなければなりません。何が結論が分からないような、しつぽをつかまれないようなことを主たる目的とするようなしゃべり方、言い方というのは、もう通用しなくなっているのではないかと。

実は、これは皆さまには、あまりぴんとこないことかもしれませんが、先ほども申しましたように、私は30年間公務員をして、できるだけ長く、形容詞をたくさん付けて、文章は40字以上で、何が言いたいのか分からないような国会答弁をせっせと書く仕事をしておりました。それが、上手な国会答弁なんですけれども、これをやっているのは駄目ですよ。

そうした国会答弁的な雄弁さ、よくしゃべるけれども、何が言いたいのか分からない、何を言おうとしているのかよく分からない、言葉のうらを考える、類推する、その空気を読むということにエネルギーを使っているのはグローバル人材にはなれないなと思います。

もってまわった表現も一つのスキルなんですけれど

も、それを、裏付ける志、自分は何をしたいのだ、どうしたいのだという気持ちがあれば、どんな言葉を費やそうと人は感動しないし動かない、納得しないのではないかなと思います。

ですから、社会に役立つ教養と、直接的には役立つけれども、人間として豊かな社会に貢献するような教養と、それを統合するのは「志」なのではないかなと思います。

自分が偉くなりたい、自分が成功したい、自分がお金持ちになりたいという、そのために有用なスキルと知識という役に立つ教養、そして、世の中をよくしたい、困っている人を少しでも救いたい、何か役に立てることはないだろうかと思えることができる教養と2つある。

後の方は、おそらく有用の材の人たちが考える価値観とは違っていますが、どちらも共通して、自分が成功するため、栄達のためではなくて、社会全体がそのベネフィットを受けることができるような物事を成し遂げる、プロジェクトを成し遂げるという力を身に付けさせることが、これからの教養教育の非常に大きな目的なのではないかなと思います。

グローバル人材を育てるための諸外国の取組み

日本もそういった教養教育で、いろいろ苦勞をしているわけですが、ほかの国も、必ずしも成功しているわけではありません。いろいろな試行錯誤を重ねています。

アメリカの場合は、欧米先進国の中では、いちばん早くマス教育を取り組んで、50%以上の人たちが進学していますが、特に公立の高校、中学、小学校は、コミュニティによる差がとても大きいのです。

地方分権ですから、それぞれが、豊かで教養の高い人がいるコミュニティならば、いい先生を集めて立派な学校をつくって、子どもたちにいい教育をしていますけれども、そうでないコミュニティでは、ちょっと悲惨な教育が行われています。

ですから、豊かな家庭の子どもたちは、イギリスのパブリックスクールに見習ってつくったようなボー

ディングスクール（寄宿学校）から、リベラル・アーツ・カレッジのような、学部の間は、小規模な教養教育をしっかりと大学で学んだうえでロースクールとか、あるいはビジネススクールといったような、プロフェッショナルスクールに行ったり、大学院で研究者としての勉強をするというような教育が行われています。

ただ、大学院、研究者といま申しましたけれども、それでも、その指導教官が、自分の好きなことだけ、得意な分野だけを教えるのではなくて、例えば、経済学だろうが法学だろうが、社会学だろうが、順番に基礎として身に付けて、そのうえで、専門性のある近隣領域も学んで、最後に自分の研究をする。

アメリカの高校までの公教育はクエスチョンマークがいっぱいあります。大学へ行って、学部教育辺りから、ようやく本気で人材教育をして、プロフェッショナル・スクール(大学院)でしっかり体系的に教えるべきだというのが、粗っぽく言って、アメリカの方策かなと思います。

イギリスの場合は、高い教育を受けられるのは、かつて上層階級の人たちで、ミドルクラスの人たちは、本当に限られた人たちしか行けないという時代が長くありました。1960年代、1970年代辺りから、アメリカのマス教育には人材の量で勝てないので、もっともっと大学教育を受け人を増やさなければならないということで、フランスやドイツなんかも共通なのですけれども、急激に大学進学者を増やしています。

そして、イギリスの場合も、18歳、(グレードナイン、グレードテン)の試験で、どれだけの学力を持っているか全国調査をして、そのときに、高い点数を取った人は希望の大学に行けるけれども、そうでない人は、希望の大学に行けないというように、先ほど私が申しました、高校卒業時の学力テストを、しっかり厳しくやっています。

フランスもバカロレアとか、ドイツはアビトゥーアとか、大学進学をする前の段階で、どれだけの勉強をしてきたかということをしっかりチェックしたうえで全国どの大学に行ってもいいと。ただ、急激に増えたものですから、ヨーロッパの大学もマス教育をどのようにやっていけばいいか、きっちりとマネジメントが

できなくて、非常に困っています。

その中で、エラスムス計画をEU全体で行っています。若い研究者、あるいは大学院レベル、学部レベル、それぞれに国際交流をしよう、自分の国以外の大学で1学期以上学ぶことを奨励して、それぞれの大学で取った単位を、全て認め合おうというかたちになっています。

学生を外へ出す、現場へ出す

いま、3大学で共通の教養教育を行うということを始められるそうですけれども、3大学ではなくて、EU国内の、イギリス、ドイツ、フランス、スペイン、イタリアも全部ひっくるめて、別の大学で学んだことを単位としてカウントしようということです。

実はそれは、アメリカの方にも影響が及んでおりまして、私の方の大学にハーバード大学のインターンが夏休みに必ず来るのですけれども、これは、日本を専攻している学部生が夏休みに日本で過ごしましょというプログラムなのです。

かつて10年ぐらい前までは、自分のところがいちばん良い教育をしているのだから、何もわざわざ外に出す必要はないというぐらい自信満々だったのですが、そのハーバードでさえ、やはり、自分の国の中でだけ学生を囲い込んでいては刺激が乏しくなると、外へ出さなければいけない、現場に出そうということで、長い時間ではなくて、8週間から10週間というレベルなのですけれども、それでも囲い込むことはよくないというように考え方が変わってきています。

それに引き替えますと、日本はお金の問題もあるのですけれども、留学をするというのが魅力的ではない選択肢になっています。3年生の夏ぐらいまでに帰って来ないと就職で立ち遅れるとあって、留学をしない学生がどんどん増えているというのを聞くと、とても残念だなという気がします。

日本の大学の場合は、どうして就職に振り回されるのでしょうか。3年生の10月から解禁とされていた企業リクルート活動が12月に繰り下げられましたけれども、大手の人気企業の場合は、もう4月の連休前に内定者が決まってしまう。

私どもは、4年生で必ず卒論を書かせたり、卒業制作をさせようとか、必須の単位があるのですけれども、企業では、3年生の後半から4年生における学業成績、卒論成績というのは、まったくカウントしません。

入学試験で、どの大学へ入った人、この程度の知的能力がある人、大学におけるスクリーニング能力には信を置いて、大学でどういう勉強をしたか、どういう教養を身に付けたか、どういう専門的な知識、技術を身に付けたかというのは二の次なのです。

日本の企業では、ピラミッド、アップオアアウトではないのですけれども、その中で、上手に適応できた人が階段を上って行くわけです。戦後のどさくさの闇市から日本の企業が立ち上がったころには、ソニーやホンダなど、いろいろと独創的な経営者の方たちがいらしたわけですが、第2世代、第3世代になりますと、企業の中で昇進してきた、いわゆる一流大学を出た方たちです。

その昇進をするときに、強い個性の人たちというのは、やはり嫌われます。外へ出されてしまいますので、企業の中で期待されるようなバランスよく能力を発揮した人たちが昇進をしていくわけです。

しかし、昇進してトップになると、今度は、「個性がない」とか、「もっとコミュニケーション能力を発揮なさい」とか、「教養をにじみ出させてください」とか、必要とされる能力が、がらっと違うので大変だなと思います。

少なくとも、20世紀終わりの頃から、最近の日本の大企業の中では、職場で育てられた実践的な人材は、とてもたくさんいらっしゃるのですけれども、一般的な教養、あるいは、その組織の外でも通用するような人、ユニークな考え方を持った、本当に個性的な人というのは、企業の中では、その場を与えられることが少なかったのではないかなと思っています。

本当の教養と人間としての共感力

どうしたら、必要な教養を身に付けることができるのかということで、いちばん最後のところをちょっと見てください。

大学生は、教室に座って、先生からいろいろな知識

や事実を教えてもらう。しかし、傷ついたり失敗したりすることがあまりないように、保護される存在にとどまっていたら、本当の教養、人間的な共感力というのは身に付かないのではないかな。

共感力というのは、自分が失敗して傷ついて、悔しい、悲しい、情けない思いをしたときに、「そうだ、ほかの人も、失敗したときや傷ついたときに嫌な思いをしているんだ。そうさせないためにはどうするか」、あるいは、力が足りないで、悔しいな、悲しいなという人と一緒に、「自分も力は足りないだけけれども、協力して何かやりましょう」という、それが共感力だと思います。

常に成功ばかりして、みんなから尊重されて、痛い思いや悲しい思いをしないで育ってきたエリートに共感力を持つというのは、とても無理難題なのではないかなと思います。

実際に自分がプレーヤーにならないで外で見ていると、ラケットの振り方はどうの、あのショットの仕方が怪しいなんていうことは、いくらでも言えます。人がやっていることを批判していても、共感力は育ちません。自分が実際にやってみると、「あ、できないんだ」と、「自分には力がないんだ。ここをもっとやらなきゃいけないんだ」ということが分かります。

いまの日本の若い人たちに足りないのは、情報、知識ではなくて、現場での体験、実際に社会に貢献したという手応えを持ってないことではないかなと私は思います。自分が行ったことが、直接役に立っていることが見えるとたいへん勇気づけられます。

それだけではなくて、失敗したときに、それを通して人への共感力が育ちます。それによって、こんなに苦しんでいる人がいるんだ、世の中をよくするために、自分に何ができるんだろうか、「これはできない、自分は力がないからもっと勉強しなきゃいけないんだ」というふうに、触発されるのではないかなと思います。社会での役割を果たさせようと思っても、おそらく最初は失敗ばかりでちゃんとできません。それによって、共感する力が生まれてくるのではないかなと思います。

そこにすらすらと、農業、林業、介護、福祉なんて

いうことを並べていますが、「これはとても大事な仕事です、そういう目で見ないでください」と怒られることは承知のうえですけれども、若い人たちが、こうした分野に入って体験してみる。そこにどういう現実があるのかを知る。

エラスムス計画において、欧米の大学生たちが、異文化との遭遇によって大いに触発されているように、日本人の学生も本当は外に行けばいいのですが、国内で生活をしていても、いろいろ触発されるのではないかと思います。大学の中でできること、大学の外でできること、その両方が、大学生に真の教育を付けるためには必要なのだと思います。

対 談

はじめに 一対談者の紹介一

○司会

引き続きまして、ここからは、「大学における学びと教養－改革の可能性を探る－」と題しまして、対談を行っていただきます。

対談者は、先ほど基調講演を行っていただきました坂東眞理子先生と、京都大学名誉教授の上杉孝實先生に、お願いをしております。

上杉先生の略歴をここで少しご紹介させていただきます。

京都府のお生まれで、1961年京都大学大学院教育学研究科修士課程を修了、奈良女子大学等の勤務を経て、1978年京都大学助教授、1987年同教授となりました。その後、京都大学教育学部長、日本社会教育学会会長などを歴任され、現在は京都大学名誉教授でいらっしゃいます。

主な著書、編著書には、『現代文化と教育』、『地域社会教育の展開』、『生涯学習と人権』、『生涯学習・社会教育の歴史的展開』などがございます。

対談のコーディネーターは、京都三大学教養教育研究・推進機構の委員長を務めております、築山崇、京都府立大学副学長が務めます。

教養とは何か 一基調講演における2つのポイント一

○築山 それでは、短い時間ではありますが、先ほどの坂東先生のご講演を受けて、大きくは、教養というものを、今日の時代、社会の中で、私たちがどのように考えていくかということと、もう一つは、坂東先生にだいぶお時間を割いてお話をいただいたのですけれども、大学でその教養の教育、あるいは教養に関わる学びを、これからどうつくっていくのかという、大きくは二つの話題で、いまご紹介がありました上杉先生と、ご講演をいただきました坂東先生の対談というかたちで進めてまいりたいと思います。

先ほどの坂東先生の話の中で、冒頭部分と、後半部分に少し分けたかたちで、「教養とは」ということについて、私としては非常に刺激的な提起をいただいたかなと思っています。

冒頭部分で、「教養というのは社会の主流の学問である」とか、「世界の中で培われる」というよりは、「むしろ社会の周辺において生まれてきた」というところが、特に日本文化を振り返ったときに特徴としてあるのではないかというお話がございました。

それから、後半部分のところでは、「これが教養だと思う」と端的におっしゃっていただいたのですけれども、全てを受け入れる広さという表現もお使いになりましたし、もう少し具体的には、あらゆる人に対して礼を持って、あるいは、あらゆる人を大切に育て、丁寧に対等に接することのできる力を培っていくことが、教養ということではないかという提起を、グローバル化という、こんにちの社会背景とも関わらせて提起をいただきました。

その辺りを一つの手掛かりにしながら、まずは上杉先生の方から、ご感想も含めて少しお話を伺いたいと思います。

上杉先生は、先ほどのプロフィールの紹介にもございましたが、社会教育、あるいは生涯学習をご専門にされておられます。学校以外の、社会、職場や家庭や地域における、暮らしの中での学びということにも深く関わって研究を重ねてきておられますので、そういった視点も含めて今日は話していただくことで、坂

東先生の講演内容を深めていくことができると思っております。

人とともに生きる力と 論理的に思考する力

○上杉 坂東先生に、たいへん示唆的なお話を承ったと思っております。

かなり前になりますが、1972年でしたか、ユネスコで『フォール・レポート』というものが出たときに、どういう学習が大事かということで、Learning to beという考え方が出ました。つまり、「何かを所有するための学習（Learning to have）」ではなくて、「人間であるための学習」といいますか、そういうものとして Learning to be というものが提唱されました。

これは、アメリカのハッチンスという有名な人の影響もくみ取ることができるわけです。ハッチンスの場合は、グレートシンカーというような、優れた思想家の書いた本を読んだり、あるいは、そういう思想に触れるということを重視したということがございます。しかし、その後、「人とともに生きるための学習」という考え方が出てまいりました。

今日、坂東先生のお話で中心になっていたのは、そこではないかと思っておりました。つまり、Learning to be というのは非常に大事なんだけど、下手をすると、冒頭におっしゃったように、場合によっては独り善がりになったり、または、一部のエリート的な感覚で自分は豊かだということで終わってしまいかねないのです。

もちろん、人間というのはそこでとどまるわけではないのですが、しかし、坂東先生はそこどころ、まさに他の人と生きるという学習に、教養というものを見いだされたという実感を持ったわけです。

ただ、日本では他の人とともに生きる学習と言いますと、ちょっと気になっていますのは、むしろ他者に同調すると言いますか、他者に合わせるということに、きゅうきゅうとしている状況というのが私たちにもあるし、若い諸君にも結構見られることです。

そういう中で、今日先生がおっしゃったのは、共感というのは非常に大事ですけども、それは、自らも

いろいろな経験をする中で、痛みも味わい、あるいは、挫折も味わう中で出てくるのだということだったと思いますけれども、それとともに、ロジカル・シンキングということをおっしゃったのが、非常に大事なところだと思います。

つまり、論理的に考える、しかもそれが非常に説得的だと思いましたが、異文化の人や、異なった人たちへの説得力というところにつながっているのだということです。つまり、人とともに生きるというのは、相手を論破することでもないし、あるいは単に人に合わせてしまうことでもなくて、相手に論理的にいろいろと納得してもらうために話していく、あるいは伝えていくというか、語りと言いますか、そういうことに重点を置かれたというのがたいへん印象的だったわけです。

最近では、例えばディベートばやり、これは一種のゲームのようになっているわけですが、日本人にとって、確かに討論訓練というのは必要なだけけれども、どちらかというと、相手を負かすという面でディベートゲームが使われているのではないかと思ったりも致します。

それから、最近ではいろんな情報に多々流されてしまう。情報というのは、ある意味断片的なのですが、それをどのように統合していくか、総合する力と言いますか、そういうものが非常に大事になってきているという印象を大変強く持っています。

先ほどからの先生のお話は、そのような核心を突くようなところで、われわれに語っていただいたと思っておるわけです。そういうことで、また先生の方から、さらにその中身について、深めたものをお話しいただきたいと思います。

グローバルということで押さえていらっしゃるのですが、世界市民という言葉がありますけれども、まさに私たちは、世界市民にならなければならない。そのためには、先ほどから出ておりますように、人とともに生きる力を育てなければならない、それがまさに教養というものであると、端的に言えばそういうことをおっしゃったのかなと思います。

ただ、これが教育の世界になってくると、では、そ

れをどうやって実現するのかということが、次の話題なるのだろうと思いますので、それはまた後ほど語り合うということになると存じます。

○**築山** では、ただいまの上杉先生からお話は、先生のご講演を受けて、一つの感想として語られましたので、坂東先生の方から、最後の方は少し時間も少なくなっておりましたので、補足でも結構ですし、教養というところに関わって、特に他者とともに生きるということで、ユネスコの学習の柱になっているような観点の指摘もございましたので、少し付け加えて、ご発言いただければと思います。

大学における学びと社会における 学びの往復

○**坂東** 上杉先生に、とても温かいコメントをいただきまして、ありがとうございました。

私は、公務員から、いきなり大学教育の世界という水の中に入って、夢中で水泳をしているような状況なのですけれども、その中で日ごろ考えていて、言いたいことは山ほどあるんですけども、それをどのように言っているか、まさに「心余りて言葉足らず」だったのではないかと思います。それを上手にくみ取っていただきまして、ありがとうございました。

でも、本当に、ラーニング中のいろんなことを知っていると、「あの人は教養がある」と誤解されているのではないかと。逆に、旧制高校における教養教育という幻想に、私たちはまだとらわれていて、カントを読んだとか、ヘーゲルが分かったとか、マルクスは読んでいないと恥ずかしいというような知、それらを知っていることだと、短絡的に思っています。

でも、教養は、多くの情報を知っていることではなくて、それを材料として、自分でその中から加工する、自分なりの判断や言い方で、もう1回表現することができることなのです。

単に、to knowとto beのところ、何が正しいのか、何が美しいのか、何があらまほしき姿なのかという価値観が自分の中で加えられなければならないのではないかと思います。

ただ、先ほど、実はこの対談に入る前に、大学生の

方から聞かれて「ああ、そうだな」と思いましたことは、いまの大学生たちは、教養なんて必要だと思えない、知らなくても恥ずかしくない、おそらく、できなくてもいいんだというのでしょうか。

昔の旧制高校、あるいは私が大学生だったころには、みんなが知っていることを自分が知らないと感じる、あの人はこの本を読んでいるのに、私はまだ読んでいないというような、一種の知的スノビズムと言いますか、何でも知らなければならないということが基本にあったような気がします。いま、そう思わない人たちが、知らないことが恥ずかしくない人たちに對して、知ることは楽しいんだよ、面白いんだよと、どう働き掛けるのでしょうか。

テレビのクイズ番組ではないですけれども、知らないと感じるので、知っている方がいいというだけでは説得力が乏しい。特に大学時代に、知りたい、身に付けたい、自分なりに情報を整理して、提供したいというようなことの楽しさを、どうやって味合わせるかということだろうと思います。

その後も考えていたのですけれども、教室の中でいくら教えても、本を読んでも身に付かない。やはりそれを使わなければいけない。与えられた情報や知識を、自分で使って、それが役に立つか立たないか、どう受け取られたか、受け取られなかったか、伝わったか、伝わらなかったかということを、経験させることとミックスしなければいけないのではないかと思います。

それが、私が最後に申しました、社会へ出す、それでおしまいにしてしまうのではなくて、その経験を持って、もう一度また学ぶということにつながっていくのではないのでしょうか。

日本の場合は、大学で教えたけれども、身に付かなかったものを、職業に就いたときに、やっとゼロからまた身に付けようとするわけです。大学時代では、53、54週のうち、30週しか授業をしていないのですから、残りの20週以上の間に、社会で経験をさせて、もう一度大学に戻らせるという、そのフィードバックの仕組みというのをつくらなければいけないのかなと思っています。

また、社会とまではいかななくても、聞いているだけではなくて、人前で発表をさせる、ロールプレイングなんかも含めて、自分が相手を説得するような経験を持つように、仕掛けを考えなければいけないのかなということで、大学教育と教養については、そのように、いま模索しているところです。

大学における教養教育と学生の学び

○**築山** 最後の部分は、文字通り上杉先生のご専門である成人教育、ないしは生涯学習と関わってくる中身でした。

ここで、ひとまずいまのお二人のお話、そして、坂東先生の先ほどのご講演の冒頭部分でもございましたが、知識と言いますか、知の価値と申しましょうか、それ自体を決して否定するわけではありません。

坂東先生のお話の中でも、一つの教養のイメージとして、社会的に自分の力を、さまざまなかたちで発揮していくという、国家、社会にとって有用な知識を維持するという、材としての側面と、もう一つ、人間としての豊かさという言葉でおっしゃいましたが、その二つが統一、調和したかたちで、ひとまず教養ということイメージできるのではないかというお話がございました。

単に博識であるとか、何かうんちくを語られるということが、こんにちでは、もはや教養という言葉では通用しないというところは、おそらくお聞きの皆さまも共感いただける部分ではないかと思います。

そういうこともあって、新聞の出版広告欄を気に見ていただきますと、教養という2文字が入った本の出版が最近ちょっと多くなっていますね。大学の改革の中でも、教養教育ということが、実は20年ぶりぐらいに大きな焦点になってきております。

教養という、本当に耳慣れたと言いますか、古くから繰り返し耳にしてきた言葉、概念ではあるのですが、いま、そこが新たな焦点になりつつあるというところがあります。

そこでは、今回、3大学で、医科大学も含めてですけど、健康、あるいは仕事、そして工織大の特色であるものづくりといった観点を広く取って、あらた

めて教養というものを考えていくことが求められている状況があると思います。

ちょっと、そんなことを若干念頭に置きながら、ここからは本日のメインテーマでもある、大学では、その教養をどう学ぶのか。教養教育をどうしていくのかということに関わって、お話を続けてまいりたいと思います。

坂東先生のご講演の中で、二つの積極的な提起をいただいたと思うのですが、一つは、知的好奇心に関わってお話です。知らないことを分かるのは楽しいという感覚を、特に、現代の若い人たちが持ちにくくなっているのではないかと。知的好奇心というものを、もっと活性化させるような仕組みとか、環境が大事ではないかというお話でした。

もう一つは、個性というのは、しっかりとした基礎の上に花開くものであって、先生のお言葉を借りますと、多くの中学生、高校生を思い浮かべたときに、そういう基礎、基盤の部分非常に弱くしていながら、「伸び伸びと自分らしく」という幻想を抱いているのではないかという、かなり強い表現が使われたお話がありました。

ちょっとその辺りを受けて、上杉先生の方から、大学での学びに関わる教養についてのお考えをお聞かせいただければと思いますので、よろしくお願ひします。

○**上杉** 大学で、どのように教養教育をやるのかということは、たいへんな難しさを抱えていると思います。専門学校との大きな違いは、やはり教養教育というのが相当の比率でしっかりと位置付いているということだと思います。専門的な職業人をつくるのだけでも、それが、よき市民的教養というのと重なったかたちでないと、大学教育の意味というのは少ないのだらうと思います。

そういう意味で言えば、先ほどから出ている基礎の教育というのは、ちょっと乱暴な言い方ですが、本来的には教養教育以前の問題と言えなくもないのです。これは、坂東先生のご指摘にもあったのですが、受験との関係もあるのですが、理系、文系と早くから分けてしまって、物理、化学を知らないで文系はもと

より理系の学生になっている例というのも、私学などではあり得るわけです。

文系だといって、物理、化学、あるいは生物というものについて、ほとんど知らなくていいのかどうかということもあるわけです。そこから、本来的には変えていかなければならないところが多々あるかと思いません。基礎教育は重要ですけども、大学で、基礎教育ということで教養教育が尽くされてしまうというのも、これまた問題があると思っております。

つまり、大学で行う教養教育というのは、先ほどから出ていますように、知的好奇心であれ、あるいはロジカルな考え方であれ、そういうものを身に付けさせるということですので、それは当然いままでの先生方も努力されておりますが、さらにそこに、視野の広さと言いますか、広いパースペクティブが得られるようなことをしなせんと、専門的な知識がどんどん積み重なっていても、実際にそれが、どのような意味を持っているのかが分からないままということになりかねません。

医学の方であれば、当然いま生命倫理の問題ということに直面しておられるわけですし、あるいは文系でも、この科学時代においての、社会のありようというものについて考えなければならぬわけです。そういったことから考えましても、ある種の、この広いパースペクティブをどうやって得るのかということ、このカリキュラム上においても工夫していかなければなりません。

確かに、総合科目というのが、いろいろ用意されるようになりました。これも先ほどから坂東先生が強調されていますように、現実との重ね合いにおいて教養というものを考えていくときに、極めて大事だと思います。つまり、単に一つのディシプリンをやるだけでは、なかなか、この広いパースペクティブを得られるとは限りません。

そうしたとき、学際的に総合科目というものが設定されることで、そこで広い視野というものが得られる可能性は高い。ただし、その場合、教師の方が断片的に自分の専門を語り、次の教師にバトンタッチしていくことになりかねない。そこで、まさに総合性という

ものが発揮できるようなかたちでカリキュラム構成が成されているのかどうかというようなことが問われるわけです。自分も大学にいて、そういうことができたとは言えないわけです。

もう一つ、教養教育というのは、いままで、どうしても大人数でやるという傾向がありました。この辺は、京都大学でもずいぶん問題になって、研究室に入ることができる範囲内でゼミをやらせよう、教養教育の一環として、私が辞める少し前から、ポケットゼミというものをやっておりましたけれども、やはり、教養教育というのは、そういうところでダイアログが成されないと一方通行で、聞く人たちが増えても、自己を表現するというようなことにつながりません。

もちろん最近の学生は、プレゼンテーションが上手です。割と早くからそういう技術は身に付けております。ただし、本当に突っ込んだ論議というかたちを経てのプレゼンテーションになっているのかどうかというのは、また別問題です。

そういうことを考えましても、いま申しましたように、一つは専門職業というものと関連付けで、身に付いていく幅広さというものがいるだろうと思えます。

もう一つは、そのことが同時に市民的教養の問題にもつながるのですが、やはりこの時代というものを踏まえて、それとの付き合い方で、さまざまなディシプリンも考えていくような教養がいると思えます。

かつて私たちが若い学生のころに、今は亡くなられた永井道雄先生（のちに文部大臣も務める）が、アメリカから来た学者が、ある学生をつかまえて、「君、何を研究しているんだ」、「デューイを研究しています」、「じゃあ、いまの日本の教育は、デューイから見てどう思うんだね」と尋ねると、その学生は、「私は、日本の教育に関心があるのではなくて、デューイに関心があるんです」と答えたというので、そのことの問題を指摘されました。

私たちは、そのことも含めて、現実と思想の結合を考えなければならぬでしょう。グレートシンカーであれば、どう現実を見たであろうというようなことを考えても、ロジックについての学習の手掛かりが得ら

れるのではないかと思います。

私の関わった学生の中にも、現実に流されてしまっ
て、ただ現象だけを集めてしまうというプレゼンテー
ションが見られましたので、そういう弊害を超える方
法というものも考える必要があると思っています。

教養としての共感力と論理的思考力

○**築山** いまプレゼン力ということがありました。先
ほどの坂東先生のご講演の中でも社会人基礎力とい
うのがありました。最近は、〇〇力ということがいろ
いろ言われております。

坂東先生から、先ほどの話の中で、論理的な思考力
ということに関わっての話と、最後に、共感力とい
うところで、私の勝手な聞き取りですけれども、失敗や
傷つきの体験というものの、ある意味大切さと言いま
すか、そこでの想像力によって育つということがあ
るのではないかというお話でした。

そして、最後、時間もありませんでしたので、いま
の上杉先生からの提起で、学んでいる学生、学びの側
にとって言えば、もう一步突っ込んで、踏み込んで考
える、あるいは表現する、行動するという学びが教養
というところで求められているし、そういう学びを組
織するセンスのようなものが、教育者である教師に求
められているというご指摘もありました。

そのようなご指摘も受けて、論理的な思考力、ある
いは共感力に関わって、もう少し先生のお話、お考え
を伺えればと思いますが、いかがでしょうか。

○**坂東** この子は、全然勉強に興味がない、知的好奇
心がないなというような学生が、何かスイッチが入
ると急に熱心に調べたり、本を読んだり、書いたりす
ることがあります。

そのスイッチというのは、どういうときに入るのか
なと思うと、だいたいそういう子は、「私は頭が悪い。
成績がよくない。能力がない」というように思い
込んでしまっているのですけれども、「私、分かりま
せん」と、分かろうとする努力さえしないというこ
とが多いのです。でも、その自分がやったことが感謝
される。褒められるよりも感謝される方が、いいスイ
ッチが入るような気がします。

やったこと、教えてあげたことが感謝される、役に
立ったことを認めてもらえることが、スイッチのき
っかけになっているような気がします。そうした場を経
験させることが、大事なのかなと思います。

そして、知らなくても恥ずかしくないというのが、
知的好奇心が持てない、教養を身に付けようというモ
チベーションがない印だと申しましたけれども、一方
で、学生たちは人に好かれたいのです。好かれたいと
か、とてもいい人だと思われたいということに対して
は、みんな強いモチベーションを持っています。

例えば、自分が興味を持っていることや専門的に
やっていることに対して、相手が無視すると、それは
非常に悲しくて失礼なことなんだから、相手が知ら
なくてもいいから聞いてくれるとうれしいんだと。

人付き合いの道具として、即効性を、現世利益を付
け加えると、知ろうという態度を見せることがいいの
だ。知ろうという態度を見せると、いい反応が返っ
てくるんだということで、「私、知りません」とか、公
務員にはよくいるんですけど、「専門外です」、
「それは私の担当ではありません」というように、固
まってしまうのを打ち破る、一つのきっかけになると
思います。

ですから、あまり崇高なことを言っても、学生
たちはぴんとこないと思いますので、ぜひ現実に、具
体的に役に立つような経験をさせるということが、い
まの大学教育で工夫しなければならないことだと思
います。

○**築山** いまの学生に限られたことではありません
が、人に好かれたいと、非常に強く感じている青年
たちが多いということは、よく耳にする青年評です。

この間のいじめの問題なんかをめぐっても、子ども
たち同士、若い世代の中での人間関係に対して非常に
敏感で、デリケートなので、それ故にいろんなしんど
さを抱えているということは、とみに語られていると
ころだと思います。

そういった、いまの若い世代の抱えている、ある
種、生きづらさのような世界と、今日のお話の教養と
いうこと、もっと言えば知りたい、知ることによって
開ける世界、あるいは、知ることによってつながって

いくという、その関係は、学習面のことと、いわゆる人間関係や心のことというのが議論としては、どうも別々に語られがちなどころがあると思います。

今日の坂東先生のお話を伺っていると、そこを別々のものとして議論しているのでは極めて不十分で、教養というか、人間性というものは別にして、人間としての豊かさということ、知恵、知識ということと結び付けることの重要性、必要性があるのではないかと思います。ちょっと私の勝手な読み取りかもしれませんが。

○坂東 私はいつも思っているのですけれども、女性はあまり知ったかぶりをする、もてないということで、成績がいいとか頭がいいとか、教養のある女性というのは、煙たがられるという思い込みがあるようです。正直な話、私も、できるだけそれをにじみ出さないのがもてる秘訣だと、はかない努力をしていたのですけれども、あまり効果はありませんでした。

それが、いまの若い男性たちにも、知ったかぶりだったり、教養があるというのは、何かうざいなとか、好かれないというようなムードがあるので、これも変えていかなければいけないと思います。

相手のことを分かってあげる、プラスイメージの教養人、自分の知識をひけらかすというネガティブイメージの教養人ではなくて、ポジティブな教養人のイメージを、つくらなければいけないと思いました。

京都三大学教養教育研究・推進機構への期待

○築山 男女共同参画に関わってこられた先生らしいご発言だと思います。

今回のこのフォーラムですけれども、京都府立大学、医科大学、そして工芸繊維大学という、国立、公立三つの大学が、教養教育というところで、いままでも、特に京都は、コンソーシアムと言いまして、大学連合をつくっております。そして、他大学の授業でも出席して単位を取ることができる制度が、すでにつくられております。

今回のこの共同化は、他大学で単位が取れるというだけではなくて、三つの大学で開講されている授業

を、イコール、自分が所属している大学で開かれている授業というかたちにしていく取り組みとして、急速に具体化を図ってまいりました。

先ほど山田知事が冒頭のあいさつで、日本で初めての試みだと強調しておられましたが、そういう試みが、現在進行中であるということをお知らせすることが本日の趣旨ですので、今回、若い方にもご参加いただいて、非常にうれしく思っております。

私は公立大学で教務の責任者をしておりますけれども、先日、府立大学の学生たちに集まってもらって、学生たちが考える、これからの教養教育というワークショップを行いましたけれども、「体験的なプログラムをもっと増やしてほしい」とか、「もっと幅の広い科目を受けたい」など、いろいろな要望も出ておりました。

そういう取り組みも、今後、積極的に展開して、今日のように、広く市民、府民の皆さまに知っていただければと思います。実は、あの洛北の府立大学の北側のコンサートホールとの間のところに、今日のこの資料の最後のページにありますような写真の建物ができます。いずれは、総合資料館と本学の図書館や文学部が一体になりますので、あそこの風景が一変します。

それだけではなくて、三つの大学の学生たちが、文字通り日常的に交わって、学び、課外活動をするという空間、出会いの場をつくっていかうとしています。

最後に、このように比較的近くにあって、三つの大学が、共同で教養教育の運営を図っていかうという取り組みに対して、お二人の先生からコメントをいただきたいと思います。

工芸繊維大学の場合は、ホームページを見ていただきますと、「知を学び美を感じ技を極める」というキャッチフレーズが出てきますけれども、その技という言葉に象徴されまして、ものづくりを一つの個性にしている大学でございます。

それから、医科大学は、文字通り命と健康に関わるところで、教育、研究を世界最先端で進めている大学です。

府立大学は、京都府内を中心にして、それぞれの地域の皆さま方と深く連携をするということを課題に、

多面的に教育面で取り組んでいこうとしています。

そういう意味で、それぞれの大学の規模は決して大きくはありませんし、それぞれ個性がありますし、基盤も築かれてきていると思います。そういうところで、新しい取り組みということに関わって、お二人の先生から少しお言葉をいただいて、まとめに代えたいと思います。

○坂東 大学の改革について議論をしていると、大学というのは議論ばかりしていて、変化に対する感度が鈍い、スピードが鈍いということを言われたことがあります。でも、この3大学が共通の教養教育をなさる、その感度のよさ、そして実現されるスピード感というのは、ご立派だなと思いました。

そして、先ほど申しましたような、中堅規模の大学とマンモス大学を比較すると、私たちの方が、よっぽど丁寧な教育をしていると思います。しかし、マンモス大学の選択肢の多さというのは、一般教養などはいろいろな科目の数がたくさん並んでいて、選択肢が広いという点では、かなわないと思っていました。

でも、この3大学が協力されることによって、ご自分のところで提供されている科目よりも非常に範囲が広い科目が提供されて、それを、学生たちが自由に取れるようになったというのが一つあります。

それから、個性が濃いということ、先ほど府立医大の学生さんに対して、府立大の学生さんがおっしゃっていましたが、おそらく、それぞれの大学が違った個性を持っているだろうと思います。学生さんも違うでしょうし、教員の方はおそらくもっと違うと思います。

自分のいた大学の教員の方と、違った教員の違った教え方によって、創発、創造するということが触発されるので、そういう意味でも、質的にも量的にもとても幸せなことだなと思います。ぜひこれを進めてください。

○上杉 先ほど、いまの学生たちは仲よくと言うのでしょうか、嫌われたくないという気持ちが強いとお話もありましたが、たぶんこの3大学が一緒になって教養教育をやられるというのは、違った分野の学生たちが共に学ぶという中で、それぞれが違うから

こそ討論しやすい面が出てくるのではないかと、思っています。

多くの学生に、討論をすることを避ける傾向があります。つまり、対立するということを恐れてしまうのです。それこそ坂東先生がおっしゃった、異質の人にも説得できるような力を育てるうえにおいて、違った分野の学生たちが一緒になって学ぶことの意義は大きい。もちろん総合大学ではそれがあるのだと言えばそれまでなのですが、この近辺の3つの大学が、そういう機会を用意されるというのは、非常に意味のあることだと思っております。

もう一つは、教員の方々が、自分の大学の学生ではなくて、他の大学の学生の、それこそ評価にも関わってくださるということですね。日本の大学の大きな問題というのは、それぞれの大学で、教員がいろいろと評価するわけですが、それによって他の大学とのアンバランスというのがずいぶん目立つわけですね。つまり、お互いが高め合っていくということが非常に弱いということです。

だからといって、例えば京都の大学コンソーシアムに結集している大学が、一斉にそれをできるかということ、大谷大学と龍谷大学ならばできるかもしれませんが、やはりそれはなかなか難しいと思います。

そういうことで、この3大学であれば、まさに学外の先生が評価にも加わるるので、それによって、お互いの教育全体がレベルアップすることによって、教育全体のレベルアップも期待できるのではないかと思っております。

そのようなことで、この教養の機構が、ある種、日本の大学がいま抱えている問題を克服していく一つのモデルというものをつくり出すのではないかなと、そんなことをご期待申し上げている次第です。

「志」をもつこと 一人にどれだけのことを与えられるか

○築山 坂東先生が最後の方でおっしゃった志というのは、「社会全体が利益を得るような物事を成し遂げる力を」ということだったと思います。

これは、おそらく今日この会場にお越しいただいて

いる皆さまの、世代にかかわらず、共通する人生のテーマのような気もしますので、坂東先生から最後に、何かメッセージをいただいて締めくくりにしたいと思います。

○**坂東** 少年よ大志を抱け「Boys, be ambitious」というと、立身・出世が大志を抱くことなんだと。自分の成功に限定するというイメージがとても強かった。その語感をぜひ変えたい、その定義をぜひ変えたいと思います。

志というのは、自分自身の成功、幸せ、満足だけを追求するのではなく、人にどれだけのことを与えられるか。あるいは、いまの社会の仕組みなどでも、うまくいっていないところがたくさんありますので、直さなければならないことが山ほどあります。

私がいくら直さなければならないと言っても、自分に得をしようという目的意識だと人を説得することができないし、協力してもらうことはできません。一緒に変えようという協力をする場合、自分を無視して、それをみんなでやっ払いこうと言わなければ力を合わせることはできません。

その志というのは、「自分が、自分が」ということではなくて、自分が一番ほしいものを人に与えるようにしていると、それが回り回って自分にくるという言葉があるのです。志というのは、自分がいちばん大事だと思うもの、手に入れたいと思うものを、ほかの人と共有して分かち合うことです。ほかの人が手に入れられるように、自分が力を尽くすということです。サービスラーニングとか、いま若者たちがたいへん関心を持っております社会的企業というのも、それに通じると思います。

実は、普通の営利的な企業でも、お金をもうけることを目的としたビジネスは、あまり成功していません。こういう製品が人の生活を便利にする、気の毒な人を支える役に立つというようなことを目的として提供していれば、結果として成功するというのが、社会的企業の基本だと私は思います。

ぜひ、そういったマインドセットを切り替える、人が何を必要としているのか、いまの世の中で、何がうまくいかないから、困っている人がいるのだろうとい

うように、視点を、自己中心からずらせる人が志のある人なのです。

自分の成功だけを追求している人、競争に負けないように、いい学校に入る、いい企業に就職する、その中で出世するというのは、とても志が低いと思います。世のため、人のためというと、うそっぱちというイメージになってしまっているのですが、その価値観を変えていく必要があります。

世の中のために役に立っている人は、たとえ出世できなくても、お金をもうけていなくても、人から感謝されることをしている人が素晴らしいのだということ、まず私たち自身が価値観を変えなければ、若い人たちの価値観を変えることはできないのかなと思います。

おわりに

○**築山** 私たちの価値観が揺らぐような学びを、アクティブにしていかなければいけないのかなと思います。

では、今日、坂東先生のご講演をお聞きして、そして上杉先生のお力をお借りして、その内容を、いくばくかでも深めることができれば幸いです。

どうかお二人の先生方に、お礼に、大きな拍手をお願い致します。

参加者皆さまにおかれましては、今日いろいろ心に浮かんだこと、頭に浮かんだことを一つのきっかけにさせていただいて、これからの学習やお仕事、地域でのいろいろな活動に、生かしていただければと思います。

どうも、本日はありがとうございました。以上をもちまして対談を終了します。

—3大学教養教育共同化フォーラム「時代が求める新たな教養教育を考える」—

○司会

それぞれ皆さん、学び舎のキャンパスは違うわけですが、普段はどこで練習しているのでしょうか？

○カトウ（京都府立大学）

木管楽器や金管楽器は、主に京都府立大学で練習していました。弦楽器は、京都府立大学で練習する日があったり、京都府立医科大学で練習する日があったりするのですが、みんなで集まって合奏する日は、京都府立医科大学のホールを使って練習しています。

○司会

京都府立大学、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学ということで、目指しているところや校風が、それぞれ違っていると思うのですが、校内だけで普段お友だちと接触している時と、皆さんと合同で接触している時というのは、どんなところが違いますか？

○コグレ（京都府立医科大学）

京都府立医科大学は単科医大なので、医学科の学生が100人程度、看護学科の方も100人いないぐらいで、高校や中学と同じぐらいコミュニティーが狭いので、そういう意味では、京都府立大学や京都工芸繊維大学という大学はもちろん、ほかの大学の人もいっぱいいるので、いろんないい刺激をもらっています。

○司会

京都にはそれぞれ大学があって、いろんな交響楽団があるかと思うのですが、自分たちは絶対に負けないうような自慢話を、ちょっと聞かせてもらっていますか？

○コグレ（京都府立医科大学）

京都市は特に学生が多いと思うのですが、うちのオーケストラは、何とんでも多国籍オケが魅力だと思っています。そのように、いろんな大学から参加しやすく、いろんな大学の人も交流できるというのが魅力だと思っています。

○司会

三つの大学を共同化して教育を行っていくという取り組みを、今されているのですが、いわば皆さんはその先駆者、シンボルとして活躍されていると思います。今後、自分たちがどんなふうに役に立っていくと

思っていますか？

○コグレ（京都府立医科大学）

僕らは、入ったときからずっと、3大学で交響楽団として活動していて、このような「教養教育共同カリキュラム」の話が出ていて、僕の代はそうでもないのですが、後輩たちが3大学合同で教養の授業を受けるというのを聞いて、僕らとしても、3大学がより協力し合っているという意味では、この3大学合同交響楽団としては大きなメリットがあると思います。

僕らが先駆けてこういう活動をしていたということで、いろんなことに対して、3大学合同におけるイニシアチブでも取っていただけたらなと思います。

○司会

最後に、お三方の将来の夢を、それぞれに聞かせていただきたいのですが、よろしいですか？

○カトウ（京都府立大学）

私の夢は、まだ漠然としているのですが、文学部で勉強をしているので、将来は出版業界などに関わりたいと思います。あと、趣味でこのオーボエもずっと続けていきたいなと思っています。

○コグレ（京都府立医科大学）

僕は医科大学ということで、将来医者になるとは思いますが、京都府立医科大学は、付属病院の方で院内コンサートや音楽祭を開いております。そういう音楽祭に関わりながら、ホルンとか吹けるような医者になれるなと思います。

○ハマダ（京都工芸繊維大学）

僕は、工織の応用生物課程で生物系のことを勉強しているのですが、漠然としか考えていないのですが、警察に入って、科学捜査みたいなことができたらいいなと考えています。

○司会

やはり、それぞれの道と、ずっと音楽に携わっていきたいというのが、共通の夢のようですね。その夢に向かって、真っすぐ歩いて行っていただきたいと思います。

どうぞ、お三方にもう一度、拍手をお願いします。ありがとうございました。

基調講演・対談・全体を通しての主な意見・感想・要望

	評価点	改善・要望事項
基調講演	<ul style="list-style-type: none"> ○教養を広い意義で考えるきっかけになった。 ○失敗を通して人への共感力が生まれる…… というのは、自分の子供（大学生）に対する家庭での教育についても、自信を持って子供に伝えていけると思った。 ○日本の大学における education について考え直すきっかけをいただいたと思う。 ○価値観を理解した上で納得させる力（共感力）をつける教養（力）に同感した。 ○現代社会に適応するためには、自分自身も変わらなければならないと思った。 ○現代人に不足している意識やルールが如何に大事かどうかということについて分かりやすく話された。 	<ul style="list-style-type: none"> ○もっとインパクトのある話でもよかった。 ○現在の状況の批判が多くなされていた。そもそも制度をつくった側にいた以上、自らの責任ではないのか。非常に矛盾を感じる。 ○一般人向きの話ではなかった。 ○講演内容の話がむずかしく、わかりにくかった。
対談	<ul style="list-style-type: none"> ○教養教育の内容、ありよう、工夫など知ることが悦ばしいとする世界をどう開かせるかについて、議論がかみ合せて参考になった。 ○3人からの視点で、同テーマについて話すとわかりやすい。 ○大学教育の捉え方が学べた。 ○今の大学が抱えている問題がわかった。学生が知る習慣が刺激になればと思う。 ○大学教育での世界とつながる人間の重要性、必要性、そのための教養教育のあり方、ポジティブな教養教育が浮き彫りにされよかった。 ○非常に的を得た発言が多かった。 ○時間が少なかったのが残念でした。3名の大学で活躍されている先生の立場からお考えが聞けて良かった。 ○教養について再認識ができた。若い人にも聴いてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一方的に聞くだけでなく、フロアとのインタラクティブが必要ではないか。 ○やや焦点がまとまらなかった。 ○上杉先生があまり語られなかった。 ○上杉先生だけの講演も拝聴したい。 ○大学生や3大学出身の著名人を加えて対談を行っても良かったのでは。 ○2人の先生の直接対談の場面がもう少しあって良かったのでは。
全体を通しての意見・要望	<ul style="list-style-type: none"> ○教育共同化フォーラムということで、共同化のための内容がもう少しあればよいと思った。人材養成に関しては、すごく勉強になった。 ○共同化、大賛成。うまく実現してください。先がたのしみです。 ○共同化について、今回初めて知りました。大変良い取り組みだと思う。息子も工織大を卒業したが、この取組を体験させたかったと思います。早期実現を期待します。 ○次の企画を楽しみにしています。 ○とても良い企画。公立（国立）の大学が私立の学長に講演を求めたことに敬意を表する。 ○多くの大学が共同化するのが必要。井の中の蛙にならないためにも。 ○（府大 OB）先輩から、昔は医大と府立大との「教養」がいつしよにあった時期があると聞いています。昔は心の豊かな人が多かったような気がします。工織大の方は、特に他の2大学にない人材があるように感じます。クラブ活動でも互いに教えあえばと思うと期待でいっぱいです。 ○教養教育だけでなく、生物分野、化学分野、専門性の面での共同化が進むことを期待しています。 ○このような3大学の共同化は大変素晴らしいことで、山田知事の一層のご努力をお願いしたい。もう一つ考えることは、大学-高校間がもっと近くなり、お互いの現場の教師の人達との意見交換等から生まれる次代への変革ができればと思います。 ○今回の全体の構成は良かった（学生の演奏、基調講演、対談による教員へのメッセージという流れが）。 ○新たに教養教育について、興味を持ちました。市民が気軽に参加できるこのような計画がたびたびあればよい。 ○今回のお話を聞いて、仕事で困難に直面しても乗り越えていけると思いました。基本を習慣にするよう頑張ります（30代男性、会社員）。 	<ul style="list-style-type: none"> ○何事でもメリット、デメリットがあるはず。3大学教養教育共同化のデメリットも明らかにした上で、メリットを強調すべきではないか。 ○小規模大学の共同化がメリットを発揮できるでしょうか？ 豊かな教養教育は、まずもって自前の大学で構築すべきではないか。 ○各個人が全部集まって連携したことのみ強調しないように努めてください。 ○教育研究会や中学・高校のPTAなどに周知されているのでしょうか。参加者の世代が高齢であるが、これから大学に行こうとする世代やその親にこそ聞いてもらうべきであり、周知方法がどうだったのかと思う。 ○学生さんやその父兄が知りたくなるようなフォーラムをしてみてください。 ○3大学の教養教育は、私達が学んだいわゆる”教養課程”を単に3大学の学生をまとめて教育するのではないと思うが、カリキュラム等が見えないので意見が述べられない。建物整備のみにとどまらないように！ ○カメラマンの方たちの靴（音のしない靴）、シャッター音に気をつけてほしい。人数制限をすべきではないか。

教員一覧

■運営委員（長）

築山 崇（機構運営委員長）
京都府立大学副学長

林 哲介（機構運営委員）
京都工芸繊維大学副学長

高松 哲郎（機構運営委員）
京都府立医科大学副学長

■機構専任教員

児玉 英明（教育 IR センター）
藤井 陽奈子（リベラルアーツセンター）

■機構兼任教員

上田 純一（リベラルアーツセンター長）
京都府立大学教授

大谷 芳夫（リベラルアーツセンター）
京都工芸繊維大学教授

長崎 生光（リベラルアーツセンター）
京都府立医科大学教授

上原 正三（教育 IR センター長）
京都府立医科大学教授

大倉 弘之（教育 IR センター）
京都工芸繊維大学教授

石田 昭人（教育 IR センター）
京都府立大学教授



京都三大学教養教育研究・推進機構 HP <http://kyoto3univ.jp/>

編集・発行 京都三大学教養教育研究・推進機構

住 所 〒603-8054 京都市北区上賀茂桜井町 65 グラスヒル北山 201 号室

電 話 075-706-5136

発 行 日 平成 25 年 4 月

デ ザ イ ン 秋山デザイン